

## 「定説」に対する異議

——『さよなら，むさくるしいロシア』の  
原テキストについて——

木 村 崇

### はじめに

不幸が詩人をみまえば，作品もまた不遇を強いられるのが常である。精神病を患っていたらしいフレーブニコフ〔В. Хлебников〕は，書きためた詩を枕に詰めこんでいつも持ち歩き，ときおり取り出しては書き足したり直したりしたものだから，そのテクスチュアル・クリティシズム〔текстология〕の仕事は困難を極めていると聞く。それでも自筆原稿が残っているのはまだ救われる。

レールモントフ〔М. Ю. Лермонтов〕はその生涯でおそらくもっとも大きな失意を体験した後，胸中にふつふつとたぎって，やがて固まったある決意を8行の詩にしたが，もちろんそれは，公に発表することを許されるものではなかった。今日わたしたちが目にしてしているものは，他人によって書き留められた写し〔списки〕ばかりで，それだけにあちこちテキストの不一致が目立ち，はたして原テキストはどんなであったのか，見当がつかかねるのである。思えばこの詩は，二重の不運に遭遇したことになる。詩人がいちばん伝えたかったであろう同世代人に広く訴えることができなかったという不運と，後世の人たちに歪めて伝えられたという不運とである。

文学研究者に何らかの社会的存在価値があるとすれば，原テキストを正しく復元する仕事は，そのうちの重要なひとつに違いない。ずさんな仕事の結果，かりに偽をもって真となすようなことがあれば，本来もたらすべ

き価値とは逆に、その幾倍もの害毒を振り撒くことになる。だから原テキストの吟味は、どれほど念を入れても入れ過ぎることはないはずである。詩の中のたった一語の校訂の成否が、作品の内容を一変させ、価値の反転をもたらすことがある。たしかにテクスチュアル・クリティシズムは文学研究全体の中では補助科学にすぎないが、こうしてみると、原テキストについてすでに定説が存在し、それに依拠して研究を展開することが可能なばあいであっても、ひとまずテクスチュアル・クリティシズム的再検証から取りかかることは、あながち徒爾ではないだろう。

19世紀末に未発表の作品として雑誌に掲載されてようやく、およそ50年ぶりに日の目を見たレールモントフの詩『さよなら、むさくるしいロシア』〔《Прощай, немытая Россия》〕の原テキストについては、その後、各時代のアカデミヤ版などの全集や作品集の編者たちによって、推定が二転三転させられた。しかし今日では、アカデミヤ版6巻全集〔M. Ю. Лермонтов. Сочинения в 6-ти томах. Изд-во АН СССР, М.-Л., 1954-1957〕の第1巻が、原テキストとしてそれまで採用されていたものを脚注にまわし、別のテキストを基本テキストとして採録したことをきっかけに、ソ連の学界で激しい議論が沸き起ったものの、ソ連科学アカデミヤ正会員ヴィノグラードフ〔V. V. Виноградов〕が自著《Проблемы авторства и теория стилей》(Изд-во Худож. лит-ры, М., 1961)の中で総括的見解を展開した後は議論が沈黙し、事実上この問題については決着がついたかたちになっている。ヴィノグラードフはアカデミヤ版全集編集者たちの優柔不断ぶりを批判し、彼らが基本テキストとして採録したものが原テキストだと主張した。そして今日もっとも新しい全集である、俗に「小アカデミヤ」と呼ばれている4巻本の改訂増補版〔M. Ю. Лермонтов. Сочинения в 4-х томах. Изд. второе, испр. и доп., Т.1, Л.,《НАУКА》, 1979〕では、基本テキストのみを残して脚注は廃止され、そこに基本テキストと辛うじて「並記」されていたもうひとつの、それまで正しいとされていたテキストは巻末の注解の部に移された。これはこのテキストを、写しの幾種かの異文のうちのたんなるひとつとして扱

うことを意味する。

ソ連の出版事情のもとでは、アカデミヤ版の權威はほぼ絶対的であり、普及版選集も、大衆的刊行物や教科書類も、これを典拠とする慣行になっている。注解のくわしいアカデミヤ版はふつう出版部数が限定されていて極めて入手が困難であるから、一般の読者は、普及用書籍を通じてひとつのテキストを、いわば唯一絶対のテキストと信じて読むわけである。したがって今ここで「定説」を再検討することは、何千万という、専門家ではない人たちに代って、かれらの権利を守るためになされる、責任ある仕事だということになる。

真理は多数決によって採択されるものでもなければ、業績優秀な人の見識によって裁定されるものでもない。表題の詩の原テキストに関するソ連の学界での論争は、きわめて唐突な印象を残して終わった。定説がある程度形成されるまでには、ふつう議論がかなり煮詰まっているものである。しかし50年代のこの論争は、討論が十分行なわれたとはいいがたい。またヴィノグラードフの説は、後に詳しく検討するように、方法論的にも内容的にも根本的な欠陥を持っている。にもかかわらず、今日の「定説」をいち早く提唱して、事実上1954年のアカデミヤ版の「優柔不断ぶり」の原因を作ったアンドローニコフ〔И. Л. Андроников〕は、かれがオクスマン〔Ю. Г. Оксман〕と編んだ4巻本選集の注解の中で1964年に、ヴィノグラードフ説には「議論の余地なき論拠」が提示されていると評価して、虎の威さながらにそれを援用し、自説の正当化を試みている。<sup>1)</sup> テキスト鑑定「決定権」を事実上握っている科学アカデミヤのロシア文学関係機関がすでに上述のような方向を辿り、アンドローニコフのようなレールモントフ研究の第一人者が、学界の重鎮であったヴィノグラードフのきわめて高圧的なきめつけに満ちた意見を「御墨付き」として押し載っている状況のもとでは、ソ連においてこの問題の再検討が近い将来行なわれるものとは考えられない。

1) См.: М. Ю. Лермонтов. Собр. соч. в 4-х томах. Под ред. И. Л. Андроникова и Ю. Г. Оксмана. Т. 1, М., «Худож. лит.», 1964, стр. 594.

本論文の目的は、『さよなら、むさくるしいロシア』の原テキストとして現在採用されているものが、かならずしもその資格を十分有するものではないことを様々な角度から立証し、「定説」の見なおしの必要性を訴えることである。この課題が純粹にテクスチュアル・クリティシズムの興味の枠を出ないものならば、等閑視することも可能である。だが、一見、形式のレベルでの諸関係を論理的に明らかにするだけでよいように思えるこの現象の中に、じつはレールモントフの文学の根本的理解を揺がすような重大問題がひそんでいるものと考えられるのである。したがって本論文は、わずか8行の詩の中のいくつかの語彙の推考のために、想像される以上の紙数を費やすことになるであろう。

## 1

ロシアの19世紀後半の文化を特徴づけるものとして、ジャーナリズムの隆盛を挙げることができる。言論、出版、集会、結社の自由をひどく束縛されながら、量的にも質的にも著しい抬頭を見せた雑階級知識人が、政治、経済、文化ののびきならぬ諸問題について積極的に発言したり意見をたたかわすことのできる場として、新聞・雑誌はサークル活動と並んで大きな役割をはたした。

世論形成とその汲み上げ機能を満足に発揮しえない国家統治機構が、国民生活に大きな影響を及ぼす種々の決定を強行しようとするほど、合法、非合法の出版活動はそれだけ活発化した。出版業が事業としてもそれなりに魅力的な分野であったことが、ロシアにおける資本主義の発達とあいまって、その発達を促がしたという事情も見逃がせない。つまり、いくつもの雑誌が競合しようとも経済的に引合うだけの読者層が形成されていたのである。いずれにせよジャーナリズムが対象とする読者層は、層の厚さ多様さからいっても、知的資質からいっても、もはや19世紀初頭や第2四半期のそれとは大きく異なっていた。プーシキン〔А. С. Пушкин〕やレールモントフやゴゴリ〔Н. В. Гоголь〕は、いまやこの時期に輩出した作家や評論家たちによって、死後わずか数十年にして古典作家としての

処遇を受け、一方ロシア文学のアカデミックな研究も盛んになった。つまりロシア文学は、いくつかの世代を経た継承関係によって成り立つ堂々たる国民文学に成長しており、西ヨーロッパでの評価も得て、世界文学としての地位を揺ぎなく占めつつあった。

こういう背景のもとに、読者層がジャーナリズムに対して、かつて不当な弾圧を受けたり様々な逆境にあったために発表されなかった古典作家たちの作品を発掘し発表することを求めるようになったのも当然である。60年代頃から徐々にそのような発表が誌上をにぎわすようになり、各誌の間でまるで競争のごとき様相を呈するようになったのは、それほど読者層の関心が強かったこと、それが雑誌の売れ行きに大いに響く企画であったことを証明しているといえよう。

時代の要求に敏感な反応を示すのに長けたバルチャーニェフ〔П. И. Бартнев, 1829-1912〕のような人物が現われたのも、けっして偶然ではない。かれは1863年に「ロシア古文書」〔《Русский архив》〕という雑誌を発刊し、約半世紀にわたってそれを主宰した。これはもっぱらロシアの歴史に、それもピョートルの大改革以降のそれに特筆される人物たちの、個人的および公的生活にまつわる資料を発掘して公表しつづけた雑誌で、関心はもちろん有名な作家や詩人たちにも向けられ、しばしばかれらの未発表作品の紹介がなされた。こういった領域での「競争」においてバルチャーニェフが他誌に抱いた対抗心が一通りのものでなかったことは十分に推察できる。だが、かれの主観的意図が奈辺にあったかという問題以前に、その鑑識能力や専門家としての水準の点で、同代人や後世の入びとから芳しい評価を与えられていないことを指摘しておかなくてはならない。<sup>2)</sup> 「ロシア古文書」誌にあれこれ作家の未発表作品なるものが麗れ

---

2) たとえばソ連で出版された9巻本の文学小百科〔Краткая литературная энциклопедия, М., 《Сов. энциклопедия》, Т.1, 1962〕でバルチャーニェフの項を引いてみると、未発表文献と称してかれが行なった数多くの公表の仕事は、古文献学およびテクスチュアル・クリティシズムからすると十分な水準に達してはいなかったことが明確に指摘されているし(См. стр. 462), わたしたちが今問題にしようとしている論争の過程でも、プローホロフ〔Е. Прохолов〕

いしく紹介されると、後でみるような、手厳しい批判の声が上ったことからしても、この人の仕事は、よほど注意をして取り扱わなければいけないのである。

もっとも、盗人はいつの場合も、かならず例外なく盗みを働くものであるという命題がなり立ちえないのと同様に、バルチャーニェフの無責任な仕事ぶりの事実がいかにも多数列挙されようとも、論理的には、かれの仕事のすべてがいいかげんなものであったということにはならない。しかし、ある仮説なり推定なりを批判的に検証しようとする時、その提唱者の「前科」がすでに明らかになっているなら、十分な警戒心を持って当たらねばならないのも、また道理であろう。こうした場合、かりにある特定の事例についてだけは例外的に正当さが認められるというのなら、正当性を正方向において論証するだけでは不十分で、例外性の立証という、負方向での論証もそれに加えて要求されるのである。

本論文の副題にかかげた問題に対するソ連の学界の現在の主流をなす仮説は、このバルチャーニェフが1890年に「未刊の8行詩」として発表したテキストを、そっくり原テキストとして承認するものである。この仮説の基礎となる根拠が十分説得的でありうるためには、あれこれの事実がどのくらいレールモントフの文学の本質に近いかを言うだけでは足りないのであって、まずなによりも、バルチャーニェフがレールモントフを扱ったものに関してだけは、あるいは少なくとも『さよなら、むさくるしいロシア』についてだけは、彼を信頼してもいいという、一種の「アリバイ」証明が要求されるということである。ソ連で主流の仮説に与する人ちはみな、この「例外性」立証の問題を避けて通っている。はたしてレールモントフについては、あるいは少なくとも『さよなら、むさくるしいロシア』

---

は、1899年にバルチャーニェフがチュツチェフ〔Ф. Тютчев〕の未公開の詩と銘うって載せた作品が、じつはニェクラソフ〔Н. А. Некрасов〕の書いたものであり、しかもそれまでも初公開とうたって発表したことのある作品であったという事例を挙げている（См. 《Вопросы лит-ры》, 1959, No. 5, стр. 120）。

についてだけは、「例外的」に正しいという確率が、あえて論ずるまでもなく高いのであろうか。わたしたちは、この問題から考えることにしよう。

発刊時から1890年までの約30年間に、「ロシア古文書」誌が「未刊」とか「新発表」とか断わって、レールモントフ作と推定した詩を発表したことは、都合4回ある。最初は発刊後間もない1864年の第10号であった。これには《Евфразия (Подражание Четыи Минеи)》〔『エウプロシュネー(殉教伝のまねごと)』〕と《Ребенку (В альбом Аркадию Павловичу Петрову)》〔『坊やへ(アルカージイ・パーヴロヴィチ・ペトロフのアルバムへ)』〕というエピグラムが紹介されている。それぞれ脚注が付されていて、編者の考えが述べてあるので、まずそれを覗いてみよう。前者の脚注にはこう記されている。「若き日のレールモントフの詩だといって、士官サモイロヴィチ伯がダニレーフスキイにカフカーズで口述筆記させたもの。ダニレーフスキイ伯はこの詩をわれわれに送付するについて、その真偽のほどは保障できないとし、レールモントフの作かどうか疑っているので、経験豊かな鑑定人がこの件について解明してくれるのを期待するとしている。」<sup>3)</sup>

一方で「レールモントフの未刊詩」と題しながら、臆面もなくこのような注を付する神経は、並の編集者のものではない。しかも今日この詩をレールモントフの作だと見做す人はいないのである。

ではなぜバルチャーニェフは、だれの目にも(本人も含めて)拙速だと思われる行為に踏み切ったのか。おそらくそれは、当時の出版事情と深いかわりがある。60年代のはじまりとともに、レールモントフの作品の出版状況に、ひとつの転機が訪ずれた。レールモントフの死後も、かれの強

3) 《Русский архив》, 1864, No. 10, стлб. 1087. 原文: «Продиктовано на Кавказе офицером г. Самойловичем Г. П. Данилевскому за молодое лермонтовское; присылая нам это стихотворение, г. Данилевский не ручается за его подлинность и, сомневаясь в его принадлежности Лермонтову, ждет на этот случай пояснения дела от более опытных судей.»

烈な個性を忌み嫌うものはあい変わらず大勢いたし、徹底した彼の反体制的性行に神経を逆なでされた記憶も生なましい支配層が検閲制度によって言論・出版を完全に掌握していたが、レールモントフの作品の生命力はそれらに屈することはなかった。だから早くも1847年には帝室科学アカデミヤ印刷所〔Типография Императорской Академии наук〕からスミルヂン〔А. Смирдин〕の手で二巻本の作品集が出版され、50年代には、グラズノフ印刷所〔Типография И. П. Глазунова и К<sup>о</sup>〕版の作品集が版を重ねているのである。しかしこれらは、テクスチュアル・クリティシズムからいってきわめて不完全なものであった。ところが1860年に同じグラズノフ印刷所が上梓した作品集は、ドゥディシキン〔С. С. Дудышкин〕の手で「整理、増補されたレールモントフ作品集」〔Сочинения Лермонтова, приведенные в порядок и дополненные С. С. Дудышкиным〕とうたわれており、さらに1863年の第2版になると、「原稿と校合した」〔Изд. 2-е, сверенное с рукописями〕とわざわざ断わってあり、ようやくテクスチュアル・クリティシズム的な講究の兆しが現われてきた。

これは時代の一般的傾向であった。50年代中頃からは著名な雑誌にレールモントフの新発見作品が公表されるようになる。<sup>4)</sup> 埋もれた原稿の発掘への意欲も、校合という作業へ関心が向くのも、同じ文化的要求に根ざしたものである。バルチャーニェフがロシアのジャーナリズム界にデビューしたのは、まさにこういう時代だった。

時代の要求に応えるものなら読者の関心をひくことができる。その意味で、ダニレーフスキイから入手した資料を公表することは時宜を得ている。かといってバルチャーニェフにはこの資料を鑑定するほどの力はない

4) それらをざっと数え上げてみよう。а) 《Современник》，1854, Т. XLIII, No. 1; Т. XLV, No. 5; Т. XLVI, No. 7; б) 《Русский вестник》，1856, Т. IV, Июль, книжка вторая, No. 14; в) 《Библиографические записки》，1858, Т. 1, No. 20; г) 《Отечественные записки》，1859, Т. СХХV, No. 7, Отд. 1, Т. СХХVII, No. 11, Отд. 1; д) 《Развлечение》，1860, Т. III, No. 13; е) 《Библиографические записки》，1861, Т. III, No. 16; ж) 《Наше время》，1862, No. 190.



い。そこにかれのジレンマがあった。読者に「下駄を預ける」やり方は、このジレンマを切り抜けるために思いついた、切羽詰まった知恵だったと考えるべきであろう。

この詩の後にすぐ続けて載せた4行詩のエピグラムの方はどうか。同じく脚注を読んでみよう。それはこうなっている。「1846年にモスクワでペトロフがダニレーフスキイに口述筆記させたもの。ペトロフ伯の家族はカフカーズでレールモントフと親交があった。」<sup>5)</sup> ペトロフ家とレールモントフは親類同士であった。この詩を献げられたアルバムの主アルカージイ・パーヴロヴィチは詩人と、母方の祖母同士が姉妹の関係にあったのだから、又従兄弟にあたるわけである。かれは偶然にも「ロシア古文書」誌を読んで原文との違いに気付き、1867年の同誌第7号に、その訂正と、ペトロフ家およびレールモントフとの関係を紹介している。<sup>6)</sup> バルチャーニェフはダニレーフスキイを通して得た資料について、アルカージイ・パーヴロヴィチ・ペトロフにいちおう照会する努力さえ怠ったことが、これで明らかである。もうひとつ忘れてならないことがある。それは、この4行詩の題名『坊やへ』が、編集者の創作だという問題である。これだけに限っていえば、ロシアの当時のジャーナリズム界ではけっして珍しい現象ではなかった。バルチャーニェフは「慣習」に従ったのだといえば、それまでである。だが、「未刊詩」の公表にたずさわる編集者としては、その良心を疑われてもいたしかたない。いずれにせよ、バルチャーニェフがレールモントフに関連した最初の仕事で見せたジャーナリストとしての資質は、この程度のものであった。

「ロシア古文書」誌には、その後もレールモントフの作品が掲載されるものの、「未刊」とか「新発表」とか称したものが現われるのは、かなり

5) 《Русский архив》, 1864, No. 10, стлб. 1088. 原文 :《Продиктовано А. П. Петровым Г. П. Данилевскому в 1846 году в Москве. —Семейство г. Петрова было коротко знакомо с Лермонтовым на Кавказе.》

6) М. Ю. Лермонтов. Сочинения. В 6-ти томах, Т. II, М.-Л., Изд-во АН СССР, 1954, стр. 335. 以下この全集からの引用は、巻数をローマ数字で、ページ数を算用数字で略記する。

の時間が経過してからである。この間に他の新聞や雑誌には、新たな発見の成果が続ぞく登場している。<sup>7)</sup> それらの後塵を拝して「ロシア古文書」誌に「レールモントフの新しい詩」と題して一編の詩が公表されたのは1887年の第3巻第12号の誌上であった。これにも脚注があって、それが前回とは違っていかにももっともらしいので、素直な読者ならそれを読めば、この作品の信憑性を疑ってみようなどとは思ひもしなかったであろう。そこにはこう書いてある。「レールモントフの友人ニコライ・イヴァーノヴィチ・ポリヴァーノフがアレクサンドラ・ニコラエヴナ・バフメーチェヴァに贈り、彼女のもとに保存してあった原文に拠る。P. B. [パヴェル・バルチャーニェフ]」<sup>8)</sup> ここにいうポリヴァーノフはたしかにレールモントフとは同年の友人で、モスクワ大学およびペテルブルグの近衛曹長・騎兵士官学校で共に学んだ仲だった。かれは自分のアルバムに詩人から詩を書

- 7) それらの主なものをひろってみよう： а) 《Русская старина》，1872, Т. V, No. 2(《Казначейша》Лермонтова, —о присылке рукописи); б)《Русская старина》，1872, Т. V, No. 2, (М. Ю. Лермонтов: неизданные стихотворения, отрывки и письма); в)《Вестник Европы》，1873, No. 10, (Юношеская повесть Лермонтова); г)《Русская старина》，1873, Т. VII, (No. 3) (Неизд. стих. Лермонтова в немецком переводе Боденштедта); д)《Русская старина》，1874, Т. X, No. 5, No. 6, (“Валерик”, стих. М. Ю. Лермонтова, по подлинной рукописи автора); е)《Русский вестник》，1882, Т. CLVII, No. 1, (Княгиня Лиговская. Роман. Неизданное произведение М. Ю. Лермонтова); ж)《Новое время》，1882, No. 2113, (Новооткрытая поэма Лермонтова “Сашка”); з)《Саратовский листок》，1884, No. 56, No. 57, (Новые подлинные рукописи Лермонтова); и)《Нива》，1884, No. 12, (Ненапечатанное стих. М. Ю. Лермонтова); к)《Русь》，1884, No. 5, (Неизд. стих. Лермонтова); л)《Библиограф》，1885, No. 1, (Автограф М. Ю. Лермонтова); м)《Русская старина》，1887, Т. LVI, No 10, (М. Ю. Лермонтов. Неизд. юношеское его стихотворение “Исповедь”).
- 8) 《Русский архив》，1887, КН. III, (No 12). стр. 580. 原文 :《С подлинника, сохранившегося у Александры Николаевны Бахметевой и ей подаренного приятелем Лермонтова, Николаем Ивановичем Поливановым. П. Б.》

いてもらってもいるので,<sup>9)</sup> 自筆原稿を持ちあわせていても不思議ではない人物といえる。ただ1874年に没しているのも、この時点ではたとえ「ロシア古文書」誌に異論があろうと、唱えることはできなかった。一方アレクサンドラ・ニコラエヴナ・バフメーチェヴァとはどういう女性だろうか。その姓および父称から判断すれば、これは、レールモントフが生涯を通じてもっとも熱烈に愛した、しかも突如15才以上も年上のニコライ・バフメーチェフ〔Николай Федорович Бахметев〕という男と結婚することによって詩人の心に永遠に癒えぬ傷を残した女性、ヴァルヴァーラ・ロプーヒナ〔Варвара Лопухина〕の娘ではないかと思われる。ただ、筆者の持つ文献には、オリガという娘の他に、生まれて間もなく死んだ子のいたことが記されているだけなので、<sup>10)</sup> 別人の可能性もある。いずれにせよ、バフメーチェフという姓を持つもので、レールモントフと直接関係のあった人々は、この時点では皆他界していた。だから1864年の時のように、関係者から疑念を持ちこまれる可能性はなかった。

異論をはさんだのは、新聞「新時代」〔«Новое время»〕であった。それは、次のような、かなり高飛車な批判記事を發表したのである。「『ロシア古文書』誌の12月号に、その編集部による言明によれば、詩人の友人であったポリヴァーノフがバフメーチェヴァ女史に贈り、彼女のもとに保存してあった原文に拠ったという、レールモントフの未刊の詩が載った。レールモントフはとりわけ近年もてはやされており、わが国の歴史物雑誌で、かれの詩の下書きだの、すっかり完成した作品だのが見当たらないような号は、ほとんどない。『古文書』誌が引っぱり出してきた詩は——もしかりにそれが本物だと認めたところで（1841年、つまり詩人の才能が最も花開いた年の作とされているのにだ）——レールモントフ詩の持つ力や美をぜ

---

9) См.: В. Мануйлов. Летопись жизни и творчества М. Ю. Лермонтова, Изд-во «НАУКА», М.-Л., 1964, стр. 37-38.

10) Там же, стр. 93.

んぜんそなえてはいず、初期のそれにすらおよばない。これはまちがいに  
く他人の詩の出来の悪い翻訳である」<sup>11)</sup>

これほど「無礼」な挑戦に、バルチャーネエフが反論した形跡はない。そして今日では、彼がイニシャルながら署名入りで「原文に拠った」と断言してはばからなかった「レールモントフ詩」を採録している全集は存在しないのである。それにもかかわらず、バルチャーネエフはひきつづき翌年の同誌1月号に、まったく同趣旨の脚注にイニシャル署名を付けて、何と「1842年作」(?! ) という「新発表のレールモントフ詩」なるものを発表した。<sup>12)</sup> もしかかれが詩人の没年を知っていれば、後世にこれほどぶざまな汚名を残すこともなかったかもしれない。日本人である論文筆者が読んでも、その稚拙さに苦笑せざるを得ない詩を、なぜ「レールモントフの新発表詩」などと偽ったのであろう。時流に遅れまいとする編集者の焦りがそれをさせたのではないか。そうだとすればこの人は、24年前の過ちを、さらに悪質にしたかたちで再度犯したことになる。

さてわたしたちがこれから問題にしようとしている8行詩は、このようにわく付きの人物の手で、同じ雑誌に、同じような体裁で発表された。およそ3年のち、1890年第11号の375ページの下3分の1ほどのところに、「レールモントフの未刊の8行詩」〔Неизданное осмистишие М. Ю.

11) 《Новое время》, 1887, No 4231. 原文 : «В декабрьской книжке “Русского архива” напечатано неизданное стихотворение Лермонтова с подлинника, как заявляет редакция, сохранившегося у г-жи Бахметевой и ей подаренного приятелем поэта Н. И. Поливановым. Лермонтову в последнее время особенно повезло и почти нет книжки наших исторических журналов, в которых не появлялись бы наброски его стихов или уже совсем готовые произведения. Стихотворение, приводимое “Архивом”, — если признать его подлинность, — хотя и помечено 1841 годом, годом расцвета таланта поэта, — вовсе не имеет силы и красоты лермонтовского стиха ранних его годов: это точно неотделанный перевод чужого стихотворения» 〔下線部は紙面ではイタリック体——木村〕

12) 《Русский архив》, 1888, кн. I (No 1) стр. 129.

Лермонтова] と題して紹介されているものがそれだ。詩行のテキストの他に、丸カッコで囲んだ、編注とおぼしき文言が、その前と後に見える。前のそれは「(カフカーズへの出立を前にして)」〔(Перед отъездом на Кавказ)], 後の「(同世代人が詩人の朗読を書き留めたもの)」〔Записано со слов поэта современником)] となっている。<sup>13)</sup> 詩行のテキストそのものは次の章で他の異文のテキストとともに取り上げることにし、今は、編集者がこの詩の発表に際して補足した情報を問題にしよう。

詩の内容から、「カフカーズへの出立を前にして」詠まれた詩であることは一目瞭然である。別の章で十分考察するが、問題とすべきは、詩人にとって何度目のカフカーズ出立の時に作られた詩なのかであり、したがって、この編注はほとんど何も補足していないにひとしい。あとの丸カッコ内の表現は、バルチャーニェフのそれまでのやり方とは少し異なっている。以前のかれならば、この「同世代人」とは誰なのか、名を（その信憑性はさておき）公表したことであろう。今回かれはなぜ名を伏せたのか。詩の危険な内容が資料提供者に累を及ぼすかもしれないからだとは考えられない。なぜなら、これはきちんと検閲を済ませて、つまり当局の許可のもとに堂々と「ロシア古文書」誌の頁を飾っているのだから。

ここで奇妙な事実を指摘しておかねばならない。バルチャーニェフは、これとは別の異文テキストをイエフレーモフ〔П. А. Ефремов] に宛てた17年前の1873年3月9日付の私信の中で、「まだ他に、レールモントフの詩で、原本から写したのがありますよ」〔Вот еще стихи Лермонтова, списанные с подлинника.] といって書いているのである。<sup>14)</sup> さらに、プチャータ（Н. В. Путьята] に宛てて同じ頃発信されたとおぼしい書簡の中では、イエフレーモフに知らせたのとは一カ所だけ異なる同一の詩を紹

13) 《Русский архив》，1890, кн. III (No 11), стр. 375.

14) См. II, 358. この手紙はソ連科学アカデミヤ・ロシア文学研究所に保管されていて、論文筆者は実物をたしかめているわけではない。しかし、この問題を論じたほとんどの論文が引用しているので、この通りの文言であることを信用したい。

介し、「ルールモントフの自筆の原本に拠った」〔С подлинника руки Лермонтова〕と断っている。<sup>15)</sup>

後の章で見るように、この三つの解説の属する時期に、バルチャーニェフが結果としては異なった三つの異文テキストに接触した可能性そのものは否定できない。だが今は、その解説自体の真偽のほどを問題にしているので、その点をとくに吟味してみよう。引用13), 14), 15) の表わす内容をかりにA, B, Cとすれば、それぞれが真または偽の時の組合せは計8種類になる。問題を整理するため、そのおのおのの組合わせについて考えてみよう。

① A = 真かつB = 真かつC = 真

全体としては偽である。AとBまたはAとCが同時に真である組合せは成りたちえないからである。自筆原稿か、それに相当するような原本を確認していながら、聞き書き程度の、資料価値の低いものの方のみを公表するのは両立しえない矛盾である。

② A = 真かつB = 真かつC = 偽

全体として偽なのは、①と同様、AとBが同時に真であることはありえないからである。

③ A = 真かつB = 偽かつC = 真

全体として偽なのは、①と同様、AとCが同時に真であることはありえないからである。

④ A = 偽かつB = 真かつC = 真

論理的にはいささか辻褄が合わないけれど、実際にはBとCに対応するテキストがひとつなのに、引用の際一カ所記憶違いを犯していたというような場合には、ありうる組合せではある。

⑤ A = 真かつB = 偽かつC = 偽

論理的には全体として真である可能性は否定できない。しかし、二人

---

15) К. В. Пигарев. Новый список стихотворения Лермонтова “Прощай, немытая Россия...” — «Известия Академии наук СССР», Отд-ние лит. и яз., 1955, Т. XIV, вып. 4, стр. 373.

の人に宛てた私信の中で、嘘を平気で書くという、バルチャーニェフの人格そのものは決定的に疑われることになり、異文テキストの公表の際に何らかの恣意的作意をほどこした可能性も、逆にまた増すことになる。

⑥ A = 偽かつ B = 真かつ C = 偽

論理的には全体として真の可能性は否定できない。雑誌公表の際、編集者として誠実でない可能性は大いに大であるから A = 偽は十分ありうる。また B = 真かつ C = 偽の組み合わせも、Cに対応するテキストの引用の際に記憶ちがいがあり、かつ B よりも C をより「誇張した表現」に変えたため偽となった、というような場合がそれに相当するであろう。

⑦ A = 偽かつ B = 偽かつ C = 真

これも論理的には全体として真である可能性がある。⑥の場合と違って、イエフレーモフにあてた手紙の中で、あまりにも遠慮しすぎて「自筆の」というのを忘れたような場合である。しかし、バルチャーニェフについていえば、⑦よりも⑥の方が、大いにありうる組合せだ。

⑧ A = 偽かつ B = 偽かつ C = 偽

バルチャーニェフにテキスト鑑定能力が欠けていたことは明らかなので、どの解説も注釈もあてにならない可能性は大きい。したがってこの組合せがいちばん蓋然性が高い。テキスト改竄の蓋然性が、それに比例して高まるのもまた当然である。

1890年にバルチャーニェフは「ルールモントフの未刊の8行詩」(傍点—木村)と称して、『さよなら、むさくるしいロシア』のあるテキストを紹介しているものの、じつは、当時ルールモントフ研究に精力を注いでいたヴィスコヴァートフ〔П. А. Висковатов〕が1887年にすでに、雑誌「ロシアの往時」〔《Русская старина》〕の12月号に、またそれとは本質的な点で異なっている別の異文テキストを、ルールモントフ研究史上画期的な意義を有する、このヴィスコヴァートフ編集ルールモントフ全集第1巻の中で1889年に発表済みである。この“嘘”がどこから生じたかを考え、ふた

たび、バルチャーニェフをいかに疑うべきか、またどの点では信用してよいのかという問題に戻ることにしよう。

まず、かれが1873年にイエフレーモフに対して「まだ他に」と書いているのは、どのようなジャーナリズム界内部の事情を反映してのことであろうか。イエフレーモフは1873年から1889年にかけて7回も版を重ねたルールモントフ2巻全集の編集者であり、その直前の1872年には、「ロシアの往時」誌第5巻第2号に、13ページにわたって未刊の詩や断章、書簡などを発表した人である。〔注7)の6)参照〕。かれは「ロシア古文書」誌にも投稿しているので、もちろんバルチャーニェフとは、おたがいの仕事の現状を知らせ合う仲であったろうと考えられる。「まだ他に」とはだから、「イエフレーモフが発掘し公表したもの以外にも」という意味であろう。バルチャーニェフはたしかに『さよなら、むさくるしいロシア』のひとつの異文テキストを入手したのであるが——このことは、ヴィコヴァートフが別ルートで独自に同じ詩の流布異文テキストを発掘して公表した事実によって裏付けられる——なぜすぐに自分の雑誌に発表しなかったのだろうか。私信の中では「原本から写した」と虚勢を張ることもできようが、たしかにそれが「原本」かどうか自信がなかったのではなかろうか。だとすれば、この時点では少なくとも、1864年に体験した失敗を繰返したくはないという一片の反省が、気持のどこかにあったものと想像される。

1873年にすでに入手していた「未刊詩」の発表を1890年まで延期したのは、いやもっと正確にいうなら、1890年になって突如発表する気になったのは、この詩がルールモントフの作であることに確信が得られたからである。かれはまちがいなく、ヴィスコヴァートフが1887年と1889年に発表したこの詩のふたつの異文テキストを目にしたはずだ。そして手持ちのものと比較してみたはずだ。ヴィスコヴァートフが、ルールモントフ6巻全集を編むにあたって、どれほどテクスチュアル・クリティシズム上の努力を払ったかを知っているはずのかれは、この発表を契機に、『さよなら、むさくるしいロシア』がまぎれもなくルールモントフの作であることを、労せずして知り得たのである。かれは1873年以降のいつかの時点で、ヴィス



コヴァートフが1887年に最初に発表したものと基本的に似ている異文テキストを入手したのであろう。そしてさいわいにも、それが何か所か既発表のものとの相異点を有するという事実にかこつけて、つまりヴィスコヴァートフのものとは「違うテキスト」の詩だという体裁を整えることが可能になってはじめて——この論文で後ほど推察するように、おそらく部分的には粉飾もほどこしたはずだ——「レールモントフの未刊の8行詩」（傍点——木村）として公表に踏み切ったのではなからうか。「同世代人が詩人の朗読を書き留めたもの」という、いかにも心許ない注釈に、バルチャーニェフの「後めたさ」を嗅ぎ取るのははたしてうがち過ぎか。

なぜこのような「うがち」が可能かという、本来なら、かれが「原本から写した」といった異文テキストの方こそを——はからずしもそれは、ヴィスコヴァートフが1889年に全集に収録したものと基本的に同一のテキストであることが判明したのだから——発表してしかるべきだったと考えるからである。ただこれでは「未刊の詩」として公表する理由は成り立たなくなってしまう。バルチャーニェフは、あくまでも「未刊詩」の公表に拘泥した。かれは文学研究者ではなく、センセーションを好むジャーナリストだったのである。

バルチャーニェフに属する三つの異文テキストにおのおの付された解説や注釈の全体をひとまとまりのものとして俯瞰することによって、上記のわたしたちの整理方法に従っていえば、⑧→⑥→⑦→⑤→④の順序で、その論理的および実際的な可能性の強いことがはっきりした。このことと、わたしたちが自明になっているいくつかの事実に基づいて行なった推定とは矛盾なく一致することが分る。では次に、現在まで伝えられている異文テキストを比較してみよう。

## 2

### 《テキスト①》

バルチャーニェフが1873年3月9日付の手紙の中で「原本から写した」といってイエフレーモフに紹介したもの。手紙は現在ソ連科学アカデミヤ

- ロシア文学研究所（プーシキン館）に保管されている。

Прощай, немытая, Россия,  
Страна рабов, страна господ,  
И вы, мундиры, голубые,  
И ты, послушный им народ.  
(イ)

Быть может, за хребтом Кавказа  
(ロ)  
Укроюсь от твоих царей,  
(ハ) (ニ)  
От их всевидящего глаза,  
От их всеслышающих ушей.<sup>16)</sup>

さよなら、むさくるしいロシア、  
隷奴たちの国、旦那たちの国よ、  
それにおまえら、空色の制服ども、  
そして彼らに従順なきみら民衆よ。  
(イ)

あるいはカフカズの<sup>やまなみ</sup>山脈<sup>(ロ)</sup>の彼方なら  
隠れおおすさ、おまえの皇帝たちや  
(ハ) (ニ)  
そのおそろしい千里眼からも、  
そのおそろしい地獄耳からも。

※6行目の最後の(ニ)のところは、実際には〈ц……ей〉となっており、〈царей〉はそれを推定復元したものである。下線をつけて(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)で示した4語がテキストによってそれぞれ異なる個所である。以下、その他の異文テキストを紹介するについては不一致点のある4、5、6行目だけを引用するにとどめる。

#### 《テキスト②》

バルチャーニェフが遅くとも1887年までには、それも多分テキスト①（以下T<sub>1</sub>と略記する）と同じ項、プチャータに宛てた手紙の中へ、別紙に清書して同封したもの。この異文テキスト（T<sub>2</sub>）は、アカデミヤ版レー尔蒙トフ6巻全集の第1巻が刊行された直後の1955年に、ピーガリョフ〔K. B. Пигарев〕によって中央国立文学芸術古文書館〔ЦГАЛИ〕で発見された。

.....  
И ты, покорный им народ.  
(イ)

.....  
そして彼らに柔順なきみら民衆よ。  
(イ)

16) 前掲注 14) に同じ。

Быть может, за хребтом Кавказа,

Укроюсь от твоих царей,

.....17)

あるいはカフカズの<sup>やまなみ</sup>山脈の彼方なら

隠れおおすさ、おまえの<sup>(ロ)</sup>皇帝たちや

.....

T<sub>1</sub> と T<sub>2</sub> の違いは(i)一カ所だけである。しかも訳で見るように同義語である。

≪テキスト③≫

ヴィスコヴァートフが1887年に「ロシアの往時」誌の第12号に発表したもの。詩人がフランス語で書いた詩が翻訳であったのかどうか、またそれらと詩人の生涯の出来事との関係はどうであったかをあわせ論じた論文『ミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフ』の最後のところに、この詩は引用されている。未発表だという断り書きは別になく、出典も示されていない。

.....

И ты, им преданный народ.

Быть может, за хребтом Кавказа

Укроюсь от твоих в о ж д е й.<sup>18)</sup>

.....

.....

そして彼らに制せられたきみら民衆よ。

あるいはカフカズの<sup>やまなみ</sup>山脈の彼方なら

隠れおおすさ、おまえの<sup>(ロ)</sup>領袖たちや

.....

(i)の語は、現代ロシア語では「信服した」とか「忠実な」の意味で用いられている。しかしヴィノグラードフの説に従えば、前世紀30~40年代の詩的言語においては、当時すでに古風でもったらしい文体になってはいたものの、まだ「服従させられた」とか「誰その裁量下におかれた」と

17) 前掲注 15) に同じ。

18) П. А. Висковатов, Михаил Юрьевич Лермонтов, (Стихотворение на французском языке, 1841 г.), —《Русская старина》, 1887, Т. LVI, No 12, стр. 738-739.

いう意味で用いられていたということである。<sup>19)</sup> 論争の相手の論拠を紹介しておく必要があるので、訳ではこの説をとった。

(=)は雑誌の中では文字の間隔をあけて引用されている。検閲を通りそうにない一語のかわりに編集者があえて原本とは違えたのだということを示しているものと思われる。

≪テキスト④≫

ヴィスコヴァートフが編集したレールモントフ 6 巻全集第 1 巻に収録したものの T<sub>3</sub> より発表時期が 1 年ぐらいしか遅れていないのだが (1889), (イ)が変っている。その理由は説明されていないし、出典も前回同様示されていない。雑誌に寄稿した論文の中に引用したテキストとは違って、かれのテクスチュアル・クリティシズムの努力の成果である全集に採用したのであるから、ヴィスコヴァートフは T<sub>3</sub> ではなく T<sub>4</sub> を原本に一致するテキストとして見做したと考えるとよいだろう。

.....	.....
И ты, послушный им народ. (イ)	そして彼らに従順なきみら民衆よ。 (イ)
Быть может, за хребтом Кавказа (ロ)	あるいはカフカズの <sup>やまなみ</sup> 山脈の彼方なら (ロ)
Укроюсь от твоих в о ж д е й. (ハ) (ニ)	隠れおおすき、おまえの領袖たちや (ハ) (ニ)
.....20)	.....

(=)はイタリックで表記されている。その理由は T<sub>3</sub> の(=)の場合とまったく同じであろう。

---

19) В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит. 1961, стр. 104.  
 20) Сочинения М. Ю. Лермонтова. Первое полное издание. В 6-ти т. Под ред. П. А. Висковатова. Т. 1. М., Изд. В. Ф. Рихтера, 1889, стр. 331.

## 《テキスト⑤》

バルチャーニェフが1890年に「ロシア古文書」誌の第11号に公表したものの。

И ты, им преданный народ.  
(イ)

そして彼らに制せられたきみら民衆よ。  
(イ)

Быть может, за стеной Кавказа  
(ロ)

あるいはカフカズの壁の彼方なら

Сокроюсь от твоих пашей.  
(ハ) (ニ)

忍びおおすさ, おまえの総督たちや  
(ハ) (ニ)

.....21)

.....

同じバルチャーニェフの手で写し取られたT<sub>1</sub>, T<sub>2</sub> とは(イ), (ロ), (ハ), (ニ)のすべての点で異っていることに注意すべきである。またヴィスコヴァートフのT<sub>3</sub> とは, (イ)が一致するだけであとは異なっているということも忘れてはならない。

## 《テキスト⑥》

革命前にアブラモフヴィチ〔Д. И. Абрамович〕が編纂したアカデミヤ版5巻全集に収録されているもの。

И ты, послушный им народ.  
(イ)

そして彼らに従順なきみら民衆よ。  
(イ)

Быть может, за хребтом Кавказа  
(ロ)

あるいはカフカズの<sup>やまなみ</sup>山脈の彼方なら

Укроюсь от твоих пашей,  
(ハ) (ニ)

隠れおおすさ, おまえの総督たちや  
(ハ) (ニ)

.....22)

.....

21) Неизданное осмистиише М. Ю. Лермонтова. —《Русский архив》, 1890, кн. III, No. 11, стр. 375.

22) Полное собр. соч. М. Ю. Лермонтова. В 5-ти т. Под ред. и с прим. проф. Д. И. Абрамовича. Т. II, СПб., Изд. Разряда изящной словесности имп. Академии наук, 1910, стр. 336-337.

これは単独の異文テキストと見るべきではない。この詩への注解の中で、レールモントフ博物館所蔵の写しに依ったと、典拠が示されていて、しかも写しでは《ц……ей》となっていると明確に指摘してあることからして、これはT<sub>1</sub>を基本テキストとした上で、検閲への配慮から(=)だけをT<sub>5</sub>のそれに置き換えて合成したことは確かだからである。<sup>23)</sup>

詩人が残したテキストはひとつであったらう。詩が生まれた具体的な状況を想像すると、即興詩だったのではないかとさえ思われる。書き残された自筆の原文は最初から存在しなかったのではないだろうか。そう考えられる根拠を示そう。T<sub>1</sub>からT<sub>5</sub>(T<sub>6</sub>は単独テキストではないので考慮の対象にしない)までを比較してみて気付くのは、異文同士の相違点が中間の詩行に集中していることである。はじめの三行と終りの二行は完全に一致する。もし複数の人間がレールモントフの詠んだ詩を後でメモしたとしたら、この通りの特徴を持った異文が生まれるのではなからうか。始めと終りの記憶の印象は、中間部のそれに比べてふつうは鮮明である。この詩はレールモントフの詩の大きな特徴である実に端正な凝縮性と対句性を帯びていて、全体としてかなり記憶に残りやすい作品である。それでも中間部分の語句が、同義語で置き換えられ、誤って記憶される可能性は否定できない。

原文のテキスト(それをTとしよう)がひとつだとすれば、そこから分化した異文のテキストT<sub>1</sub>～T<sub>5</sub>の間には系統関係が成り立つはずである。しかしTを推定するという目的のためには、T<sub>1</sub>～T<sub>5</sub>の派生関係の樹立が必須の前提だというわけではない。だいいち今日伝わっていない中間的異文テキストが存在したかもしれないのだし、そのうえいくつも推測に推測を重ねるわけだから、可能性ある系統関係は複数の組み合わせにならざるをえないであろう。それでは結局、Tを特定できないことになる。わたしたちにとって重要なのはTであって、T<sub>1</sub>～T<sub>5</sub>の関係がどのような因果で繋

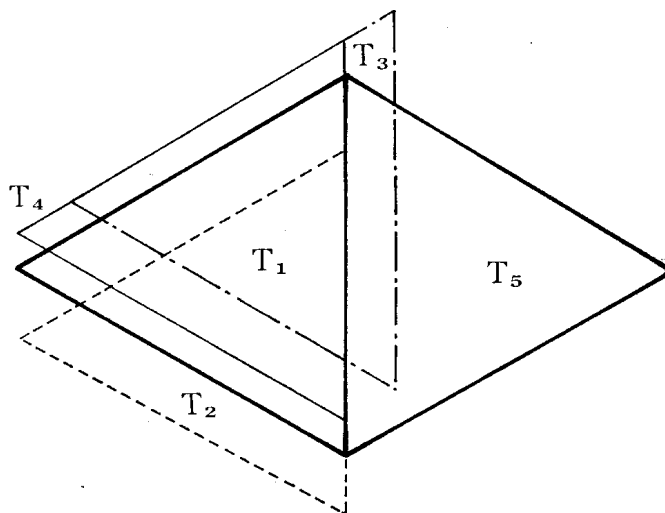
23) См. там же, стр. 479.

がっているかではないのである。

だからわたしたちは、むしろ類型関係の考察の方を重視する。類型の分類を行なうために、何かひとつ基準を定めて、それとの違いで境界線を引かねばならない。今かりに $T_1$ を基準として、(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)についてそれぞれ相異度の大きさを測定すると、 $T_2$ 、 $T_3$ 、 $T_4$ 、 $T_5$ はどのような違いを見せるだろうか。 $T_1$ のそれと同一なら0点、違えば1点として合計点を出してみよう。ところで、 $T_3$ および $T_4$ の(ニ)は先の説明で触れたように、 $T_1$ の(ニ)と同一の語と予想されるので、便宜的に0.5点として計算する。すると次のような表ができあがる。

	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	合計
$T_1$	0	0	0	0	0
$T_2$	1	0	0	0	1
$T_3$	1	0	0	0.5	1.5
$T_4$	0	0	0	0.5	0.5
$T_5$	1	1	1	1	4
合計	3	1	1	2	

これによって、 $T_1 \sim T_5$ は $T_1$ のタイプと $T_5$ のタイプに大別でき、また(イ)がもっとも問題の個所だということが分る。図示すれば次のようにも表現できるだろう。



この表と図から導かれる諸点を整理してみよう。

〔1〕  $T_3$  および  $T_4$  における(=)は、はたして  $T_1$  のそれと同一か。同一だとすれば、現存のタイプを  $T_1$ ,  $T_2$ ,  $T_3$ ,  $T_5$  の4つに収束させることができる。

〔2〕 ヴィスコヴァートフが  $T_3$  を  $T_4$  に改めた理由がテクスチュアル・クリティシズムから見て正当ならば、タイプ数はさらに  $T_1$ ,  $T_2$ ,  $T_5$  の3つに収束させることができる。

〔3〕  $T_2$  がバルチャーニェフの記憶違いか、筆記ミスか、作為に由来するものならば、タイプはさらに、 $T_1$ ,  $T_5$  の2タイプに収束させることができる。

〔4〕 これらすべての条件の成立することが完全に明らかに、もしくはかなり明らかになったとすれば、(i), (ii), (iii), (=)のおのおのについて、レールモントフの文学の、とくにこの詩が作られたとおぼしき時期のその特徴からみて、どちらの可能性が高いかを比較し、その結果総合的に判断して、どちらか一方の可能性が圧倒的に高いとなれば、 $T$ は  $T_1$  または  $T_5$  と同一か、あるいは相当に高い確率でそれらのうちのひとつと一致するとみて差支えないということになる。

これらのことは、わたしたちの今後の作業手順を示唆している。

### 3

『さよなら、むさくるしいロシア』が、詩人の死後数十年にしてようやくロシアのジャーナリズム界で採り上げられるに至った一連の経緯については、ひととおり概観した。今度は、論争の争点ごとに異文テキストの批判的な比較を行なって、真のテキストを探り当てる作業に着手する。前章末尾にまとめた手順に沿ってそれを開始しよう。

相違個所が、異文テキスト  $T_1 \sim T_5$  を通じてこの短い詩の中間の詩行のみに集中していることから、わたしたちは、その原因を、この詩が詩人を見送る人びとに向って即興的に読み上げられたからではないかと推測した。耳を通して入った情報は、記憶に従って再現筆記するとすれば、もっ



ともミスが生じやすい部分が中間部になるはずだからである。原物を目の前に置いて筆写する時のミスは、これに対して、テキストの前後にはかかわりなく生ずるはずである。少なくともバルチャーニェフとヴィスコヴァートフは、 $T_1$  と  $T_4$  がほぼ同じテキストと目されるにもかかわらず、別べつの写しによって知り得たはずであるから、この詩は19世紀末に幾種類かの写しのかたちで流布していたと考えてよい。以上から総合的に判断すると、著者の手で書かれたテキストは最初から存在せず、朗読を聞いた人がその場か、または自宅に帰って記録し、それらが人びとの間で次つぎに写し伝えられていったと考えるのが妥当であろう。

もともと音声によって創作された作品だったとすれば、 $T_3$  や  $T_4$  に書体上の工夫を持ち込んだのは、もちろん詩人自身ではなく、写し手か、それを刊行物に公表した人だということになる。同様の理由で、 $T_1$  においても、(=)が実際には“ц……ей”となっているのは、写し手の主観的意図の結果であって、詩人自身がこのところを「伏せ字」にして読み上げた(?!)わけではなかろう。これらの事実に基づいて考えると、原本における(=)には、写し手や公表者をして憚らしめる、かなりきわどい語彙があったと思われる。

$T_3$  を紹介した論文の中でヴィスコヴァートフは他にも何か所か、字間をわざと空けた書き方をしており、それぞれの場所ごとに、なぜかれがそうしたか、その意図を読み取ることは比較的容易である。それらには共通点がある。つまり、この「書体」を使用して表現した語句には、引用した内容に関して、引用者であるヴィスコヴァートフ自身の不快や不満、異議や批判があるか、ことさらに特筆しておくべきだとの価値判断が作用しているかなのである。<sup>24)</sup> つまり、字間をわざと空けて表現した部分には、ヴィスコヴァートフの強い主観の介在を認めることが可能である。

$T_4$  では(=)はイタリック体になっている。ヴィスコヴァートフが編んだ

---

24) См.: П. А. Висковатов. Михаил Юрьевич Лермонтов, (Стихотворение на французском языке, 1841 г.), —«Русская старина», 1887, Т. LVI, No 12, стр. 731, 734, 735, 737.

レールモントフ全集には、原文では何ら書体上の区別をしていないときでも、編集者の裁量でイタリック体にしてある個所がいくつもある。そのほとんどは、当該の語句の裏に、実在する特定の人物が描かれていると思われる場合で、<sup>25)</sup> イタリック体はだから、編集者が読者に向けて発している一種の注意信号である。

以上のことから次のような結論を導き出すことができる。すなわち、T<sub>3</sub>とT<sub>4</sub>における(=)の“вождей”は、ヴィスコヴァートフが入手した写しでは、“царей”となっていたであろうし、また別のルートでそれより先にバルチャーニェフが得た写しの方も、おそらくこの部分は“царей”と書かれていたからこそ、私信の中では“ц……ей”と伏せ字にしたのであろうと。そうすればT<sub>4</sub>はT<sub>1</sub>と同一のテキストであったということになる。この論文の第1章の終りで、バルチャーニェフがヴィスコヴァートフ編の全集を見てT<sub>1</sub>とT<sub>4</sub>の同一性を見抜いたものと推測したが、このように、テキスト自体の分析からも、あの予見は裏付けられたとあってよいだろう。さて慎重を期して逆方向からの検証も試みてみよう。もしかりに、(=)が“царей”でないとしたら、いかなる意味の語をここに想定しうるだろうか。“пашей”ではありえない。“пашей”なら検閲を気にすることも、伏せ字にすることもまったく無意味だからである。無条件で検閲に引っ掛かるような語彙だとすれば、皇室か正教への侮辱、誹謗、反感等が、それによって表現されているはずである。伏せ字にする時バルチャーニェフが原文の特徴を暗示したのなら、それは“ц”で始まり、複数生格の語尾が“ей”となる（韻を踏むためには、これが必須の条件である）名詞ということになるだろう。この要件を満たしそうな語彙を調べてみても、可能性のありそうなのは、“царей”の他には“церквей [教会]”があるばかりで、これも前後の意味との関連で考えると、あまりなじまない言葉だといえる。いよいよ“царей”こそがT<sub>1</sub>とT<sub>3</sub>およびT<sub>4</sub>に共通する語彙である信憑性は高まるわけである。いわんや、バルチャーニェフがプチャータにあてた

25) См., на пример, Сочинения М. Ю. Лермонтова. В 6-ти т. Под ред. П. А. Висковатова. Т. I. М., Изд. В. Ф. Рихтера, 1889, стр. 23, 53, 85, 126, 193.

手紙では、(二)の部分はまぎれもなく“царей”と書かれているのだから、<sup>26)</sup>なおさらこの確率は増すのである。

1841年1月14日、レールモントフ中尉は2カ月間の休暇を得て早速カフカーズをあとにし、2月5日にペテルブルグへ戻っている。これが詩人にとって最後の首都滞在となった。母がわりにかれを養育した祖母エリザヴェータ・アルセーニエヴァ〔E. A. Арсеньева〕の文字通りの溺愛を受け入れることができた最後の期間になろうとは、誰も予想しなかったであろう。3月9日は休暇を終えてふたたびカフカーズに帰らねばならない日であったが、レールモントフは休暇の延期を申し入れ、かなり強引にそれをものにしている。この頃にはどうも、退役して文学に自分の存在のすべてをかけたという強い願望を抱いていたらしく、その決意を受けた祖母は例によって、愛する孫のたつての願いをかなえるべく、有力者の間を奔走しはじめる。しかし4月11日頃、参謀本部の当直将校クレインミヘリ伯〔граф П. А. Клейнмихель〕から、48時間以内に首都を引き払ってカフカーズのテンギン歩兵部隊へ復帰せよとの命令を言い渡される。この決定を強く主張したのは皇帝官房第3局の長官ベンケンドルフ伯〔гр. А. X. Бенкендорф〕であったといわれる。<sup>27)</sup>

レールモントフはそれまでに2度カフカーズ追放を経験している。最初は決闘で殺されたプーシキンを悼んで書いた鋭い告発詩『詩人の死』〔《Смерть Поэта》〕を当局の目を盗んで大量に流したかどで、二度目はフランス公使の息子巴拉ントと決闘した罪によってであった。三度目は、具体的な罪状はなかったが、これは事実上政治的な「流刑」宣告ともいえた。問題の詩は、この三度目の「流刑」と密接な関係にあるとの観点に、ヴィ

26) См.: К. П. Пигарев. Новый список стихотворения Лермонтова “Прощай, немытая Россия...”, —《Известия Академии наук СССР》, Отделение лит. и яз., 1955, Т. XIV, вып. 4, стр. 373.

27) См.: П. А. Висковатов. Михаил Юрьевич Лермонтов. Жизнь и творчество. — В кн.: Сочинения М. Ю. Лермонтова. В 6-ти т. Под ред. П. А. Висковатова. Т. 6. М., Изд. В. Ф. Рихтера, 1891, стр. 376.

スコヴァートフは一貫して立っている。詩の創作時点の確定については後ほど着手することにして、今は、ヴィスコヴァートフにおける T<sub>3</sub> と T<sub>4</sub> の違いに目を向けることにする。

すぐ気付くのは、T<sub>3</sub> の(イ)が“им преданный”であるのに対して、T<sub>4</sub> では“послушный им”となっていることである。それからもうひとつ、細かなことではあるが、T<sub>3</sub> においては正しく「48時間以内」に首都から出るよう命ぜられたと説明されているのに、<sup>28)</sup> T<sub>4</sub> になると、どういうわけか「24時間以内に」ペテルブルグを立ち去るようベンケンドルフから命ぜられたと、不正確な注釈に変わっている点である。<sup>29)</sup>

先に後者のくい違いはどこから来たかを考えよう。第3次「流刑」の詳細な事情をヴィスコヴァートフは1878年8月16日にクライェフスキイ〔A. A. Краевский〕から聞き出して知っていた。だから T<sub>3</sub> を発表した時も T<sub>4</sub> を発表した時も、まちがいなく「48時間」がタイムリミットであったことは知っていたはずである。では「48」がなぜ「24」に変わってしまったのか。クライェフスキイは〈в дважды двадцать четыре часа〉<sup>30)</sup> [「2×24時間」、つまり2昼夜以内] という、少し変わった表現でこれを伝えた。もしまちがいの原因を探るなら、ヴィスコヴァートフは全集の校正の段階で、この“дважды”の脱落を見落してしまったと考えるのが、もっとも妥当ではなからうか。でなければ御丁寧にも、こんな単純な誤りを含んだ注釈を結ぶにあたって『『ロシアの往時』誌 1887年第12号中収録の拙論と比較せよ』<sup>31)</sup> などと書くわけではないのである。

ヴィスコヴァートフの注釈に従って「ロシアの往時」を比較した読者は、不思議に思ったであろう。24時間が48時間になっているのはさてお

28) 《Русская старина》, 1887, т. LVI, No 12, стр. 738.

29) Сочинения М. Ю. Лермонтова. В 6-ти т. Под ред. П. А. Вискова-това. Т. I. М., Изд. В. Ф. Рихтера, 1889, стр. 331.

30) Там же, Т. 6. стр. 376.

31) Там же, Т. 1. стр. 331. 原文 :《Ср. статью мою в 《Русской Старине》 1887 г., No 12.》

き，“*послушный им*”のところが“*им преданный*”となっていることを発見するからである。ヴィスコヴァートフは全集を編纂するにあたって、できるかぎり原本に溯ってテキストの批判的検討を行なう方針をとった。この詩もかれの手元にあったと思われる写しと照し合わせたはずである。全集刊行にかけたかれの意気込みからみて、写しは何種類か（少なくとも  $T_3$  と  $T_4$  の二種類は）手に入れたものと考えられる。これだけの事業には多数の協力者が必要であったろうし、また広範な協力が実現したからこそ、研究史上に残る成果を上げることができたのである。様々な異文テキストがかれのもとに集まってきたのは想像に難くない。だから  $T_3$  から  $T_4$  への移行は、不注意によって生じたのではなく、明らかに編者の見識による選択の結果であった。かりに  $T_3$  を“*преданный*”型の異文と呼ぶなら、 $T_5$  も“*преданный*”型異文に属するが、(ロ)、(ハ)、(ニ)における大きな隔たりからみて、とうてい同一種のテキストとは見做し難い。また  $T_3$  と  $T_4$  は紛れもなく存在した別べつの異文テキストであるから、わたしたちが前章において期待したように、ヴィスコヴァートフが  $T_3$  を  $T_4$  に改めたことをもって、テキストのタイプを3つに収束させることはできないのである。つまりこれは、要するに“*им преданный*”が正しいか“*послушный им*”が正しいかという根本問題が解決しなければ、手のつけようがない課題なのである。

これに比して  $T_2$  の(イ)と  $T_1$  のそれとのくい違いは、少々事情を異にする。 $T_2$  の発見者ピーガリョフ [K. В. Пигарев] は、プチャータに宛てた手紙に同封されたそのテキストが別紙に書かれたものであるのに対して、 $T_1$  はイエフレーモフへの手紙の行中に書かれているのだから、前者はきちんと原本から写したのであり、後者は記憶に従ってしたためたのだ、だからこそ、と強調して、 $T_2$  の方が  $T_1$  より原本との同一性の確率があたかも高いかのごとく主張する。<sup>32)</sup> ピガリョフはあまりにもナイーブに、海千

32) К. В. Пигарев. Новый список стихотворения Лермонтова “Прощай, немытая Россия...” —《Известия Академии наук СССР》, Отд-ние лит. и. яз. 1955, Т. XIV, вып. 4, стр. 373.

山千のバルチャーニェフの言葉を信じて、かれがレールモントフの自筆原稿をじかに見たものと断定しているが、<sup>33)</sup> そのことの軽率さもさりながら、別紙に書かれているという一点をもって、テキスト上の優位性を唱えるのは、あまりに速断だといわねばならない。

バルチャーニェフの注解の信頼度については、本論文第1章で見た通りである。つまりそこでの組合せでいえば⑦と④のみが、バルチャーニェフのT<sub>2</sub>に付された言葉を信ずることのできる場合だが、バルチャーニェフの人となりからして、いずれもきわめて考えにくい条件を前提としてはじめて成り立つものである。もっとも可能性が高いのは、かれに関係のある3つの異文テキストに付けた注釈、解説はすべてでたらめだったという⑧の組合せである。

こういう事情にあって、T<sub>1</sub>とT<sub>2</sub>のテキストの(1)の部分は、はたしてどれだけ信用できるであろうか。T<sub>1</sub>は、すでにわたしたちが立証したように、T<sub>4</sub>ときわめて高い確率で一致するのであるから、その実在性は確かめられたと見てよいだろう。したがってその(1)の部分も、そのままのかたちで写しに書かれてあったものと断定できる。さてT<sub>2</sub>はどうか。はたしてピーガリョフのいうように、T<sub>2</sub>は原典との一致度ではT<sub>1</sub>よりも高い信憑性を有するテキストであろうか。ピーガリョフの主張は、周知の通りふたつの「根拠」の上に立脚している。ひとつは、バルチャーニェフが「レールモントフの自筆の原本に拠った」といっていること、もうひとつは、手紙の便箋とは別の紙にきちんと書いてあるということである。前者の「根拠」が薄弱であることはすでに明らかにしたし、後者も、わたしたちは速断だと断じた。バルチャーニェフのそれまでのやり方から推して、「丁寧な書き方」それ自体は、むしろ逆の結論の根拠にもなりうるほど、あいまいなものだからである。

プチャータは、かつてバラティンスキイ [Е. А. Баратынский] やプーシキンと親交を持ったことのある人で、19世紀後半の文壇にあっては、バ

33) Там же.

ルチェーニェフが一目も二目もおくべき大先輩にあたる人物である。また文壇史的な題材その他を「ロシア古文書」誌に掲載しており、バルチェーニェフとの因縁もかなり深い。こういう関係の人に宛てた手紙において、「新発見の詩」を別紙に書き写して送ったところで、それ自体は何ら特別の意味を有する行為ではないだろう。同輩であるイエフレーモフに宛てたものが、嫉妬まじりの、いささか負け犬的動機から出た書簡であったのに対して、こちらはそういった負い目は少しも感ずることなく書かれた手紙である。またイエフレーモフはレールモントフ全集の刊行にも携わったほどの専門家であるが、プチャータの方はレールモントフについてはそれほど明るい人ではない。T<sub>2</sub>に付した注解が、「自筆の」などと、いささか勇み足めいた調子になったのは、プチャータになら、自分の気負いや自負の誇示が可能だという、潜在意識が働いたからではないのか。

こうして見てくると、T<sub>2</sub>がT<sub>1</sub>との間に見せる(イ)の部分でのくい違いは、バルチェーニェフの作為の結果ではないかという疑惑が生じてくる。別紙に書き写して、いかにもそれらしい体裁を整えようとした時、“*послушный*”を“*покорный*”と書き変えることぐらいはしかねない人物なのである。もしT<sub>2</sub>が本当にT<sub>1</sub>よりも原本との一致度が高い（なにしろこちらは「自筆の原本」から写したというのだから）のであれば、こちらをすぐにでも「ロシア古文書」誌に発表したはずである。その場合、T<sub>1</sub>もそのヴァリエーションとして公表し、読者諸氏に、かつてそうしたように鑑定を委ねるのも、ジャーナリストとしてのひとつの見識の示し方ではなかったのか。読者の中にはこの他にも、さまざまな異文のテキストを持っている人がいたかも知れないのだし、その人たちの反応がそれをきっかけに集約できれば、テクスチュアル・クリティシズムの分野では大いに意義ある行為として、むしろ評価されるはずである。そうしなかったのはもちろん、新発見作品の発表は、原本であることが立証されたものでなければ価値はないとする、当時のジャーナリズム界の一般的空気の中で、自らその大言壮語的解説の内容に疑惑を覚えたからであろう。

結論をいえば、T<sub>2</sub>というテキストの実在性はかならずしも否定できな

いが、意図的か無意識的（たとえば記憶違い）かは別としても、バルチャーニェフが改竄した可能性もまた否めない。なにしろ、これに類する「前科」には事欠かない人物なのである。

ここで、 $T_1$  をイェフレーモフに、 $T_2$  をプチャータに私信で紹介したのは、一種の鑑定依頼であった、つまり、かれらから何らかの意見や反応が寄せられれば、それを手がかりにして、あるいは口実にして、発表の機会を窺おうとしたのではないかという仮説を立ててみよう。そこでもし、 $T_2$  が $T_1$  の(イ)を意図的に改竄したものだとするれば、その動機は何であったろうか。レールモントフに詳しいイェフレーモフには、 $T_1$  という、確かに流布していた写しの方を示し、それほど詩人に詳しくはなかったと思われる老文士プチャータには、わざと(イ)の部分と同義語に置き換えて送りつけたことになるわけだが、そうするとこれは、かれらの予想される鑑識能力に応じて、わざとらしい操作をしたということになる。入手した異文テキストが一種類ではないということにしておけば、かりに何らかの疑念をはさまれたところで、言い訳が容易だという計算の上に乗っての作為だとも想像できる。どういふ返事が両者から寄せられたのか、今のところわたしたちには知る手だてがない。ただいかなる理由でかは不明ながら、バルチャーニェフは自分の雑誌「ロシア古文書」に $T_1$  も $T_2$  も発表しなかった。このことから逆に想像すると、かれの不安を解消してくれそうな、はかばかしい返事は得られなかったか、あるいは利用に価いするほど望ましい反応が返ってこなかったものと思われる。

$T_1$  と $T_2$  は(イ)の部分異なるだけで、しかもそれは非常に近い同義語なのであるから、かりにバルチャーニェフの仕業ではなく、実際ふたつの異文テキストとして当時流布していたとしても、それ自体あまり大きな問題ではない。以上のように事実と仮説に基づいて考察した諸点から判断して、 $T_2$  は事実上 $T_1$  とひとつのテキストだと見做して、この先論究を展開させていくことに、さしたる支障はないであろう。



## 4

詩の中で使われている語彙を問題にする時、その詩の作られた時期を確定しておくことは、大前提となる課題である。一般に作家や詩人の言語使用は、創作活動の進化にともなって変化してゆく。だからあれこれの作品の言語使用の比較は、共時レベルで分析する時と通時レベルで分析する時とでは、おのずから違った方法をとらねばならない。だから、作品の作られた時期がはっきりしなければ、比較分析のしようがないわけである。

『さよなら、むさくるしいロシア』は自筆原稿が伝わってはず（わたしたちの想像では、もともとそれは存在しなかった）、作られた日付を示す物的証拠がない。だから、その内容から推し量る以外に創作時点を明らかにする方法がないわけである。レールモントフがカフカースへ向ったのは1837年3月、1840年5月、1841年4月の3度であり、当然のごとく、この詩の創作時点に関する仮説も、この三つに分かれている。

はじめて『さよなら、むさくるしいロシア』を発表したヴィスコヴァートフが、「41年説」に立っていることはすでに述べた。「ロシアの往時」誌においても（1887年）、レールモントフ全集においても（1889年）、文学に生きるため退役を熱望した詩人の切なる願いを断ち切った皇帝官房第3局（秘密警察）長官ベンケンドルフ伯や、その配下のものたちに向けて発せられた憤怒の訣別宣言であると解説している。「41年説」はこの他にも、アブラモヴィチ編ロシア・アカデミヤ版全集（1910年）やアカデミヤ版全集（1954年）をはじめ、アンドローニコフやマヌィロフ〔B. A. Мануйлов〕らレールモントフ研究者、伝記研究者らの多数が採用している。

「40年説」を代表するのは、エイヘンバウム〔B. M. Эйхенбаум〕である。かれは、自分が編集した《Academia》版レールモントフ全集の中で、この詩が1840年の第2回流刑の時に書かれたものだと解説しており、晩年、1954年から刊行されたアカデミヤ版全集に参画するまでは少なくとも、「40年説」を崩していない。<sup>34)</sup> エイヘンバウムの全集編集方法やテクスチュア

34) たとえばかれが編集した全集の47年版では《Написано, очевидно, перед

ル・クリティシズムの方法をあちこちの章で手厳しく批判しているネチャー・イエヴァ編『テクスチュアル・クリティシズムの基礎』も、「われわれの見るところでは有力な仮説」だとして、この説を支持している。<sup>35)</sup> エイヘンバウムはこの詩を、発覚して逮捕された「16人会」〔《Кружок шестнадцати》〕のメンバーが、バラントとの決闘で第2次流刑を申し渡された同志レールモントフとともにカフカーズに送られた事件を結びつけて解釈しているのである。19世紀末にはまだあまり知る人のいなかった「16人会」のことを調べたヴィクトロフ〔В. Викторов〕は「この頃のカフカーズやオデッサは、ヴォローンツェフ伯の人情味ある寛容で賢明な統治のおかげで、すべての若く、自立したものたちにとっては、当時の両首都の息苦しい閉塞状況からの避難場所となっていた」と書いて、<sup>36)</sup>『さよなら、むさくるしいロシア』と内容的に共鳴し合う事情を紹介している。

「37年説」は「41年説」の否定から出たものである。この主張は、1841年に書かれた、きわめて「愛国的な」詩『祖国』（《Родина》）と『さよなら、むさくるしいロシア』は内容的に両立しえないので、同じような時期に書かれたはずはない、ということを経由している。<sup>37)</sup>

---

отъездом во вторую ссылку на Кавказ — весной 1840 года,» と解説している。Полн. собр. соч. М. Ю. Лермонтова. Под ред. Б. Эйхенбаума. М. -Л., Гослитиздат, тип, “Печат. двор” в Лгр., 1947, Т. 1, стр. 352.

- 35) Основы текстологии. Под ред. В. С. Нечаевой. М., Изд-во АН СССР, 1962, стр. 180. 一方で批判しながら、他方で支持を表明するのは不都合だと考えたのか、引用に際して、これがエイヘンバウムの唱えた仮説だということには触れていない。
- 36) В. Викторов. Кружок шестнадцати. — В ж. «Исторический вестник», год шестнадцатый, Т. LXII, 1895, стр. 178-179. 原文: «В <эти 脱字補充——木村> годы Кавказ и Одесса, благодаря гуманному, либеральному, умному управлению графа М. Воронцева, представляли убежище для всего молодого и самостоятельного от гнетущей духоты столиц того времени».
- 37) См.: М. Ю. Лермонтов. Собрание сочинений в 4-х томах, Т. I, М., Гослитиздат, 1957, стр. 344.

「37年説」はソ連の研究者が往おうにして陥りがちな図式主義的偏向の産物である。まず『祖国』を読む。その中に、研究者の中にすでに固定観念としてある「愛国的なもの」を共鳴させる何かを感じとる。ついで『さよなら、むさくるしいロシア』を読み、そのような「愛国的なもの」への対立物を感じとる。そこで、ひとりの詩人の内部でこのような両極端が同時に存在しえぬはずだから、『さよなら、むさくるしいロシア』は1841年の作ではないと考える。そのつぎにこの研究者は、『詩人の死』の終りの部分とこの詩の間に、共通するパトスを感じとる。そこでこれは1837年の作ではないかと結論する。

この考え方の基礎には、ふたつのあやまちがある。ひとつは、レールモントフの祖国観や人民観についてのまちがった理解である。現代人であるわたしたちは、すでに民族解放闘争の様ざまな成果や経験を通して、比較的純化されたかたちで、これらの観点を身につけている。一方レールモントフは、ほとんど自由と解放の展望らしい展望もない時代に、しかも社会的存在としては抑圧者、搾取者の側に属しつつ、ほとんど孤立状態で祖国を見、人民を見ていたのである。だからその“おもい”は本質的にアマルガム的な存在だったのである。今日のわたしたちの心を感動させるのは、詩人の祖国観や人民観の観念としての正当さではなく、むしろそのアマルガム的なものの吐露に込めた、苦悩する詩人の必死の“おもい”そのものなのである。

しかしだからといって、今日のソ連の教育やマスコミで強調されているような「愛国主義」と比べて、レールモントフのそれが社会科学的評価においてより劣っている、ということにはならない。『祖国』の中で詩人が、「祖国を愛する、でも不可思議な愛し方で！／それはぼくの分別のおよばないもの」<sup>38)</sup> とうたい出し、そのあと、何重もの否定によって表現している既存の「愛国主義」は、むしろ今日のソ連で喧伝されているショーヴィニズムと裏腹の「愛国主義」とよく似ているとって過言ではない。

---

38) II, 177. 原文：《Люблю отчизну но странною любовью / Не победит ее рассудок мой.》

ふたつ目のあやまちは、これらの詩が、同時期に書かれるのが不可能なほど、両極端のテーマをあつかっているという見方である。レールモントフは「むさくるしいロシア」を憎み、それと訣別する決意を持ちながら、同時に「不可思議な愛し方で」それに引かれていた。愛と憎しみの弁証法は、レールモントフの文学を研究する時、もっともよく理解しなければならぬテーマである。詩人にとってロシアはもはや絶望の対象でしかなかったが、しらけた、無表情な眼差しでそれを眺めてはいない。それは強烈な感情を叩きつける相手であった。それがレールモントフの祖国愛なのだ。だから『祖国』と『さよなら、むさくるしいロシア』は二律背反的対立ではなく弁証法的対立を示しているのであり、「37年説」を採る研究者の解釈は根底から崩れてしまうのである。

『さよなら、むさくるしいロシア』は、愛国心の位相でとらえたのでは十分に理解できない詩である。むしろこれは、詩人における絶望感の深化という位相でとらえてはじめて、その全体が見える詩ではないかと思われる。

1837年の流刑を終えて故郷へ帰る時、レールモントフは『遠方より北へ急いで』（《Спеша на север издалека》）という詩を書いている。この詩から伝わってくる詩人のおののきは、希望があるからこそ生じる不安から出たものである。かれはカズベーク山に向って自分の願いごとをふたつ言い、さらに「でももうひとつ願いがあります！／言うのが怖い——心がおののく！／追放の日以来ぼくのことをもし／すっかり故郷では忘れていたなら」<sup>39)</sup>と書いている。

レールモントフ文学には初期から後期まで、一種の懐疑主義と絶望感がただよっているが、それは、自由、闘争、自然の美など、肯定的なものに対する詩人の強烈な欲求の陰に隠れ、主旋律を奏でることがほとんどない。ただ死の年が近くなってくると急速に、孤独感、淋しさ、不幸な過去の回想、メルヘン的なものへの傾斜、不吉な予感等々が色濃くなってい

39) II, 103. 原文：《Но есть еще одно желанье! / Боюсь сказать! — душа дрожит! / Что если со дня изгнания / Совсем на родине забыт!》

く。1837年は、詩人にとってはまだ希望の時代だったのである。『さよなら、むさくるしいロシア』は、希望の時代には作りえない詩である。

ソ連では、『さよなら、むさくるしいロシア』は、「ニコライ I 世の警察体制に対するレールモントフの至極徹底した革命的反発を証明している、もっとも力強い政治詩のひとつ」<sup>40)</sup> だとか、「ニコライ帝のロシアの専制政治体制に対するレールモントフの態度が、最大限の政治的尖鋭さをもって表現されている」<sup>41)</sup>、あるいは「専制農奴制ロシアへのかれの烈しい憎悪が反映している」<sup>42)</sup> 詩だとかといった評価が、主流をなす見解になっている。

しかし、この詩の「革命的反発」や「力強さ」、「政治的尖鋭さ」や「烈しい憎悪」の外貌の奥に、どうしようもない絶望があることを、どうして誰も指摘しないのだろうか。まさにこの点において、1840年の有名な詩『雲たちよ』（《Тучи》）に表われている、まだ未練の残る別れぶりとは、本質的に異っているというのに。『雲たちよ』においてレールモントフは自分を「いとしい北から南の方へ（傍点——木村）」流されていく追われ人として描いている。情熱にも苦悩にも縁のない雲たちには祖国もないから追放もないけれど、自分はそうではないという、人間ゆえの悲しみには、「北」はそれでもまだ自分を受入れてくれてよいはずだという期待があるのである。

40) Полн. собр. соч. М. Ю. Лермонтова. Под ред. В. Эйхенбаума. М.-Л., Гослитиздат, тип. "Печат. двор" в Лгр., 1947, Т.1, стр. 352. 原文: 《Одно из самых сильных политических стихотворений Лермонтова, свидетельствующее о чрезвычайно последовательном революционно-отрицательном отношении Лермонтова к полицейскому режиму Николая I.》

41) II, 358. 原文: 《... с наибольшей политической остротой выразилось отношение Лермонтова к самодержавно-политическому режиму николаевской России.》

42) М. Ю. Лермонтов. Собр. соч. в 4-х томах. Т. I, М., 《Худож. лит.》 1964, стр. 529. 原文: 《...отразилась его страстная ненависть к самодержавно-помещичьей России.》

この期待感は、『さよなら、むさくるしいロシア』にはもはやない。「北」は自分を受入れてくれる場所ではないということを、今やはっきり理解しているのである。したがってこれは1841年のカフカーズ出立の際に詠まれた詩と見るのが妥当である。

## 5

真のテキストを求めて、いよいよ問題の核心部分に触れなければならない。レールモントフは1841年の最後のカフカーズ流刑を前にして、ロシアの人民をどう見ていたのだろうか。けっきょく、この疑問を解明することが、錯綜するテクスチュアル・クリティシズムの問題を解く鍵を与えることになる。ソ連での論争は、被定語である「民衆」〔народ〕を詩人がどう見ていたかについてはほとんど議論せず、もっぱら定語である(1)をめぐるのやりとりに終始した。レールモントフの人民観など、いまさら論じるまでもないというのか、たまに言及する人があるかと思うと、レールモントフは革命的詩人であった、革命的詩人というものは人民をかくのごとく理解する、よってレールモントフはかくのごとく人民を理解している、といった形式的三段論法の結論部分のみを振りかざすばかりで、少しも事実即した議論になっていない。その典型的な例がヴィノグラードフである。それまでの一連の論争を総括して裁定を下したかれの論法は、論理的にはきわめて不尾である。かれの論証は、“преданный”という語が19世紀の30—40年代では「服従させられている」とか「誰その裁量下におかれている」という意味で用いられていた、したがってレールモントフはこの意味で“преданный”なる語を使ったのである、ということを手をかえ品をかえ主張しているにすぎない。論理的十全さをもってそれが結論づけられるためには、まず“преданный”がその当時すでに“послушный”〔従順な〕や“покорный”〔柔順な〕と同じ意味で使われていた事実はないかどうか、あったとすれば、なぜその意味で使われているのではないといえるのかを立証しなければならないはずである。なのにかれはその点についての考察を怠った。さらにまた、たとえそれらが立証されたとしても、

それだけで“*послушный*”という語を詩人が使った可能性が自動的に否定されるわけでないことは明らかである。“*послушный*”がこの詩では用いられなかったということを積極的に論証してはじめて、ヴィノグラードフの結論は、完全に証明されたことになるのである。なのにそれが必要となる場所でヴィノグラードフが行なったのは、論証ではなく罵倒とレッテル貼りである。かれの目には、「民衆」に「従順な」などという定語をそえるのは、「隷属させられたロシア人民への蔑視」<sup>43)</sup>と映るらしい。

ヴィノグラードフの「人民観」はどうあれ、レールモントフの人民観は、その祖国観と同じく、じつに矛盾に満ちたものである。レールモントフばかりが民衆をとらえあぐねたのではない。かれの後の世代の雑階級人たちもナロードニキたちも、あるいはプロレタリア革命期の知識人革命家たちだって、ロシアの民衆，“ナロード”をいかに位置付けるかで、悩み、迷い、苦闘を重ねたではないか。インテリゲンツィアとナロードの間にある越えがたい深淵は、ソ連となった今日でも存在する。日本の知識人と大衆の境界線が、ちょうど墨絵のぼかしみたいなものなのに比べて、ソ連におけるそれは、絶望的といっているほど歴然としているのである。社会主義革命後60年以上もたっている今日、「労働者、農民、インテリゲンツィア……」と、階級・階層の区別をした呼びかけに、スローガンや指導者たちの演説でかならずお目にかかれるのは、そのことをよく物語っている。

---

43) В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит., 1961, стр. 118. ヴィノグラードフの逆鱗に触れたのは、“*послушный*”説を採るプローホロフ〔Е. Прохолов〕のアシューキナ〔М. Ашүкина〕に対する反論で、この老大家は長ながとそれを引用したあと、冷静に反証を挙げるところか、〈трудно представить себе что-нибудь более антиисторическое, субъективно-произвольное, неубедительное, далекое от прямого лермонтовского текста, чем это «понимание», относящееся к гадательной области индивидуально-читательского восприятия.〉などときめつけ、異様とも思える激昂ぶりを見せている。これでは若い研究者など、沈黙するほかに手はないであろう。

歴史書には、ロシア農民の一揆が無数といってよいほど記されているのだけれど、「ロシアのナロードは従順か?」という問題が、ソ連の知識人階層の間で議論されることは珍らしくない。論文筆者も1979年の初冬、レニングラードのドストイェフスキ博物館で催されたシンポジウムの席上で、倫理学専攻だというモスクワのある博士が演壇からこの問題を聴衆に向って提起したのを記憶している。

肉屋の主人までが「また革命が必要だ」と言ったといわれるフランスでは、ジスカールデスタンの政治は見限られ、ミッテランが選ばれた。ポーランドの国民は驚くほど短期間に、労働者のほとんどを結集する自主管理労働組合「連帯」を組織した。こういう国民に関して、「従順かどうか」を問う人はいない。

レールモントフは未完の散文小説『リゴフスカヤ公爵夫人』〔《Княгиня Лиговская》〕の中で、地の文の主に「社交界にはフランスのボードビルと、他人の意見に対するロシア的柔順さが必要である(傍点——木村)」<sup>44)</sup>と言わせている。作者自身が「ロシア的柔順さ」を“ナロード”に固有の性格と認めているかどうか、にわかには判断しかねるが、それでも特殊ロシア的現象としての「柔順さ」といった問題意識がかれの中にあっただのは確かである。一般的に言えば、レールモントフが人民大衆を見る目は、きわめて具体的であって、特定の理念や観念の虜にはなっていない。たとえばナポレオンの追放に手をかしておきながら、死後しばらくしてその遺体がパリへ戻ったのを、喚叫をもって迎え入れたフランスの人民に対して、レールモントフはこう呼びかける、「ぼくは偉大な人民に申し上げたい / 君たちは隣れむべき下らない人民であると」<sup>45)</sup>と。レールモントフは、ブルジョア革命を遂行したフランス人民の根底的な偉大さを認めながらも、同時にその無定見さを見透していたのである。

44) VI, 124. 原文: «...: свету нужны французские водевили и русская покорность чужому мнению.»

45) II, 182. 原文: «Мне хочется сказать великому народу: / Ты жалкий и пустой народ!» (《Последнее новоселье》)



レールモントフにはナイーヴな「ナロード信仰」はない。ナロードへの愛着、共感、ナロードの文化や知恵への敬意は人一倍強かったけれど、かれらがその被抑圧の長い歴史の中で身につけてしまった、卑屈さ、ずるさ、迎合性を見ることを忘れてはいない。詩人が個人であれ、集団であれ、もっとも軽蔑し忌み嫌ったのは、自己の解放のために闘おうとせず、他者におもねり、自由を奪われた状態に満足している人間である。レールモントフの語彙の中では、この種の人間のことを「奴隷」〔раб〕と呼びならわしており、闘争の意欲はありながら手段を奪われている「虜囚」〔пленник〕とは明確に区別されている。

ロシア人のことを「あわれな民だ、奴隷の民だ、上から下まで皆奴隷だ」と言ったチェルヌィシェフスキイ〔Н. Г. Чернышевский〕の言葉の中に、レーニンはかれの真実の祖国愛、大ロシア人（小ロシア人＝ウクライナ人に対してこう呼ぶ）大衆の中に革命性が欠如しているがゆえに慨嘆にならざるをえなかった愛情を読みとっている。<sup>46)</sup> レールモントフが目にしてきた民衆は、その時代からいっても、チェルヌィシェフスキイのそれより、さらにたよりない印象を与える存在であったのである。ロシアのナロードは、一方ではまわりの他民族に対して抑圧者の国の国民であったため、それが本来の革命性の発揮に大きく災いした。十月革命はレールモントフやチェルヌィシェフスキイの死後何十年もの歳月を経てようやく達成されたのである。しかもその間にはナロードニキの時代という、インテリゲンツィアと民衆の関係を象徴する苦悩の時代があった。スターリニズムの下でふたたびその革命性を眠らされてしまったこのロシアのナロードに、レールモントフが140年前、「虜囚」性ではなく「奴隷」性を見抜いたのは、当時としてはむしろ爛眼であったと評価すべきであろう。

「奴隷」の属性としてまず「柔順さ」、「いくじなさ」があげられ、ついで「ずるさ」、「裏切り」が連想されるのがレールモントフの文学における

46) См.: В. И. Ленин. Полн. собр. соч., изд. пятое. М., Изд-во Полит. литературы, Т. 26, 1977, стр. 107.

大きな特徴である。これは、レールモントフの価値観の中で高い位置を占める「孤高」、「誇り」、「不遜」、「勇氣」、「情熱」などとは対極にあって、もうひとつの体系を形成する。かれの作品の中から、いくつかそれらを拾ってみよう（引用中の下線——木村）

a) Забавы он делил послушнее раба,

—《Поэт》

〔それ〔短剣〕は奴隷より従順に慰みを分ち与えてくれた、

——『詩人』〕

b) Рабам послушным с давних пор.

—《Демон》

〔昔からの従順なる奴隷たちにとって。

——『悪魔』〕

в) ..... И на зов [.....主人の呼び声を

Боярина толпа рабов.

聞いて奴隷たちの群が、

Во всем послушная орда,

何ごとにも従順なやからが、

Шумя сбежался тогда,

ざわめきながら馳せ参じて、

—《Боярин Орша》

——『大貴族オルシャ』〕

г) И точно как рабов считает нас она.....

Так в наказаниях всегда почти бывает:

Которые смирней, на тех надет вина!.....

—《Заблуждение Купидона》

〔俺たちのことを女はまるっきり奴隷だと思ってるのさ.....

罰が下る時は、ほとんどいつだってこうじゃないか、

柔順なものほど痛い目を見るのさ！

——『クピードーはお門違い』〕

д) И, как рабы, вы предали его.

—《Последнее новоселье》

〔そして奴隷みたいに君たちはかれを裏切ったのだ。

——『最後の引越し』〕

е) А вы, надменные потомки

Известной подлостью прославленных отцов,

Пятою рабскою поправшие обломки

Игрою счастья обиженных родов!

—《Смерть Поэта》

〔さておまえら、横柄きわまる末裔ども  
 桁はずれの卑劣さで、知らぬ人なき父たちを持ち、  
 遺恨も晴れぬ名門の仕合せをば戯れに  
 奴隷の踵でかけらまで踏みにじった者ども！

——『詩人の死』

ж) Обманул тебя твой лукавый раб,

—《Песня про купца Калашникова》

〔陛下のずるい奴隷は陛下に嘘をついております、

——『商人カラージュニコフの歌』

з) Ты раб и трус — а мне не сын!...

——《Беглец》

〔おまえは奴隷だ臆病者だ、私の息子なものか!.....

——『逃亡者』

и) Я не раба его — я княжеская дочь!

——《Бэла》

〔私はあの人の奴隷じゃありません。土侯の娘なのです！

——『ベーラ』

もちろんこれ以外に、「奴隷」という語を直義で使用している例は、詩人のいくつかの作品に見出すことができる。また列挙した例文に見られるようなニュアンスをかならずしも伴わない用例も散見する。

『さよなら、むさくるしいロシア』の2行目、「奴隷たちの国、且那たちの国」の「奴隷」は、どのような意味において使われているのであろうか。

これについて、対照性をきわだたせることによって帝政ロシアの農奴制を鋭く特徴づけたもの以外の何ものでもないとするヴィノグラードフの説<sup>47)</sup>は、ひとつの可能な読み方ではある。しかしこの読み方は、国民の大多数を占める農奴たちの、1841年の時点における、具体的、現実的内面世界に詩人がいかに深く立ち入り、いかに強い慨嘆の念をいだいたかについて、読者がこの詩から詩人の生の声を感じとることを、明らかに排除するものである。レールモントフがナロードを、たんに一般的歴史的存在として、

47) См.: В. В. Виноградов. Проблемы авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит-ры, 1961, стр. 118.

彼らから離れた地点に立って傍観しつつ、農奴制のことを考えていたとしたら、ヴィノグラードフ説はまだいくらか正当性を残すかもしれない。ところがレールモントフの人民観は、そのような総論的で没主体的なものではなかった。たとえばかれの未完の歴史小説『ワジム』〔《Вадим》〕を見よ。主人公ワジムが、ロマンチズムの手法の影響で、類型的で現実ばなれした形象で終わっているのに、この小説の中の名もない農民のひとりひとり、あるいはその群集を描く時のレールモントフのかかわり方の現実性はどうかを想起するだけでも、ヴィノグラードフ流の読み方の成り立たぬことが明らかになるのである。わずか8行の凝縮した詩の中に、はたして、国家体制を「特徴づけたもの以外の何ものでもない」一行をわざわざ挿入するであろうか。レールモントフはチェルヌィシェフスキイと同じように、ロシアのナロードが支配者への従順さ、卑屈さ、自己の解放への主体性の弱さを持ち、体制変革の勢力として期待できる現状にないことからくる深い絶望感をいだいたからこそ、「むさくるしいロシア」との訣別の詩に、わざわざ「奴隸」の一語を入れたのである。この「おもい」が込められているからこそ、たとえ服従を強いられていたにせよ「むさくるしいロシア」の大きな構成部分である民衆を、別れを告げるべき相手として登場させたのである。

したがって原典Tの(1)の部分には「彼らに従順な」という意味の言葉が置かれていたはずである。そうであれば、19世紀の30年代では多義的（今日でもかなり多義的な語ではある）に使用されていた“преданный”よりも“послушный”の方に、より大きな信憑性を認めるのが妥当であろう。ヴィノグラードフは言語史的アスペクトにおいて、“преданный”の、今日ではほとんど使われなくなっている意味を紹介し、自説の根拠としているが、その意味以外にもこの語は次のような意味でも使われていた。まず第1に、ある心的な状態に「とらわれる」「陥る」「強く惹かれる」の意、<sup>48)</sup>

48) レールモントフの作品に例を採ってみよう： а) И, новым преданный страстям, / Я разлюбил его не мог. (アンドローニコフは1964年の4巻本全集の解説〔第1巻 594ページ〕において、これをヴィノグラードフのいう意

第2に、すでに形容詞化してしまい、手紙の結び文句としても使われる、「信服する」「従順な」「忠実な」の意である。<sup>49)</sup> だから、もし仮りに、Tにおいて(i)の部分が“преданный”が使われたとしても、そのいくつかの意味のうちの一つである「従順な」として用いられていた可能性も残され、ヴィノグラードフの根拠は、この一点をもってしても崩れるわけである。ただし、前後の脈絡で意味の確定が困難な場合に、ルールモントフがそのような多義語を避けたであろうと考えるプローホロフの推論は有効である。<sup>50)</sup>

ヴィノグラードフは自説を構築するに際して、そもそも重大な事実誤認から出発した。かれは、ヴィスコヴァートフがT<sub>3</sub>とT<sub>4</sub>という、(i)の部分において根本的に異なるふたつのテキストを公表した事実を知らないのである。かれは「ロシアの往時」誌にも全集にも、T<sub>3</sub>がおさめられている

味での用例として挙げているが、それはあまりに牽強付会というものである。もし引用するなら、《1831-го ИЮНЯ 11 дня》の一節“...., Беззащитно предана / Порыву бурь и зною, наконец / Увянет преждевременно она;”こそ載せるべきであった); б) Тебе я предан ... ты моя!; в) И песня вольности святой / Какая б ни была она / Уже забвенью предана.

- 49) たとえば1837年の初冬チフリスから友人のラエフスキイに出した手紙は《Вечно тебе преданный》で結ばれているし、1838年2月1日付のペトロフ〔П. И. Петров〕宛ての手紙は《—остаюсь всей душой преданный вам.》で終わっている。また大公ミハイル・パーヴロヴィチに送った1840年4月の書簡は《С благоговейною преданностию имею счастье пребыть вашего императорского высочества всепреданнейший / Михаил Лермонтов. / Тенгинского пехтного полка поручик.》と大仰な表現になっている。このように“преданный”が“покорный”などとともによく用いられていたことが分る。
- 50) См.: Е. Прохолов. Источники и анализ текста. — 《Вопросы литературы》, 1959, No 5, стр. 170. ただし、“преданный”の意味が彼の論敵アシューキナ〔М. Ашукина〕の説通り“отданный во власть”なら、いったい「誰によって」それがなされるのか、などというこの人の反証は、ヴィノグラードフに擲揄されても仕方のない、まずい論法である。

ものと思い込んでいる。<sup>51)</sup> だからそれに続いて次のような事実誤認を犯す。つまり、T<sub>3</sub>とT<sub>4</sub>がすでに公刊されているのに、「未発表」と偽って、1890年にバルチャーニェフが発表したT<sub>5</sub>は、ヴィスコヴァートフ発表のものとは5行目と6行目が違うのみで、(イ)はどれも“преданный”のまま変らないと思い込んでしまったのである。<sup>52)</sup> そしてさらに第3の事実誤認に陥る。つまり、わたしたちの命名ではT<sub>6</sub>にあたる異文テキストを全集に発表したアブラモーフイチこそが、(イ)を“послушный”に変更した最初の人だとかれは誤解したのである。アブラモーフイチが「なぜそのような変更を行なったのか」を、ヴィノグラードフはあれこれ推測しているが、<sup>53)</sup>それが滑稽な見当違いの説明になってしまったのも、もとはといえば、最初の事実誤認が原因になっているのである。これらの事実を通してはからずしも露呈したこと、それは、これほど権威主義的で高飛車で断定的な発言をしようというのに、ヴィノグラードフは、ヴィスコヴァートフ編集のルールモントフ全集も読まなかったし、アブラモーフイチ編集の全集の注解にも目を通さなかったという醜態である。かれの不当のきわまりない批判をもっとも強く受けたプローホロフは、アシューキナとの論争の中で、わたしたちも第2章で分類した6つの異文テキストをすべて引用しており、しかもその脚注において、T<sub>2</sub>の発見者ピーガリョフがT<sub>3</sub>とT<sub>4</sub>の違いに気づいていないことまではっきりと指摘している。<sup>54)</sup>するとヴィノグラードフは、プローホロフの論文もまともに読まぬまま、自説と対立するところについて、彼に「反歴史的」だの「主観的・恣意的」で「論拠薄弱」だの、あるいは「一個人の読者が読み取った、想像たくましいとでもいうべき『理解』の仕方」などと、<sup>55)</sup>罵言を畳み重ねたわけである。

51) См.: В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во худож. лит-ры, 1961, стр. 104 и 107.

52) См. там же, стр. 105.

53) См. там же.

54) Е. Прохолов. Источники и анализ текста, —《Вопросы литературы》, 1959, No 5, стр. 167-168.

55) 本論文の脚注43)に引用した文の中からひろいあげて訳出した。

ヴィノグラードフのこのお門違いの攻撃のあやまちに、ソ連の研究者が気付いていないとは思われない。ではなぜ再反論がなされないのか。このことは本論の目的から逸れるので、「想像たくましい」邪推といわれそうな推測はこれ以上しないことにしよう。

ヴィノグラードフがよほど肩入れしている問題の語“преданный”は、いったいどのようにして、異文テキスト流布の過程にまぎれ込んできたかは、当然の疑問として残る。ヴィノグラードフは、意味が単一の“послушный”や“покорный”から、古語的でかつ多義的な“преданный”が派生する可能性を強く否定する。<sup>56)</sup>しかし、この考えはけっして普遍性を持つとは思われない。記憶違いを契機にして写しのテキストが派生していく時、語彙の同義性が接点となる一方、写し手の文体的な好みの方へその派生が偏向していくのがふつうだからである。もし仮りに原典に多義語である“преданный”が使用されていたとしたら、可能性としてはそのひとつひとつの意味について異文が派生するはずなのに、実際にはそのうちのひとつの意味でしかない“послушный”あるいは“покорный”だけが現存するというのは、矛盾ではないだろうか。わたしたちは、原本を復元することを第一義的目標に据えた作業にとって、その解決はかならずしも必要にはならないと考えた（第2章）。したがってこの問題もこれ以上追求することはやめよう。

## 6

帝政ロシアの時代にヴィスコヴァートフは、自分が先に公表した T<sub>3</sub> を否定して T<sub>4</sub> をその画期的意義を有する全集に収録した。このことによって、かれは実際には T<sub>1</sub> を原本として認定したものと考えられる。また同じく革命前に、アブラモヴィチは今日でも評価の高いその全集に T<sub>6</sub> を採用することによって、これも事実上 T<sub>1</sub> こそもっとも高い信憑性を有するテキストだと判断したものと考えられる。ソビエト期に入ってもっとも

56) В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит-ры, 1961, стр. 114.

早くレールモントフ全集を編んだエイヘンバウムもまた、 $T_1$  を選んだ。

これらに真向から挑戦して、 $T_5$  の復権を試みたのはアンドローニコフである。かれは現在のアカデミヤ版全集が出版される1年前の1953年に『灯』文庫〔Библиотека «Огонек»〕からレールモントフ全集を出版し、詩人の詩の美的特徴等から判断して、とりわけ(口), (ハ), (=)の部分において  $T_5$  にこそ「レールモントフラシさ」があると主張し、ただそれだけの理由で原テキストを  $T_1$  から  $T_5$  に変更してしまった。もちろんこの時アカデミヤ版全集が編纂の過程にあることはよく知っていたはずであるから、かれのこの行為は、学界に対する大きなデモンストレーションだったのである。それは功を奏した。なぜなら本論文の最初に述べたような、アカデミヤ版における優柔不断な編集ぶりを惹起したし、そのことがまた、学界での激しい論争の切掛を作ることになったからである。

一番先にアカデミヤ版に異論を唱えたのは、 $T_2$  を中央国立文学芸術古文書館〔ЦГАЛИ〕で発見して1955年にそれを発表したピーガリョフであった。ついで1957年にテクスチュアル・クリティシズムの専門家ネチャーイェヴァが論集『テクスチュアル・クリティシズムの諸問題』中の論文において、基本的に  $T_1$  を支持する立場から、アンドローニコフの論拠に対する批判を行い、あわせてアカデミヤ版の編集者たちを、論拠すら示さぬまま  $T_5$  を基本テキストとして扱っているといつて批難した。<sup>57)</sup> 同じ年アシュューキナ〔М. Ашукина〕は「文学の諸問題」誌の No 8 に『アカデミヤ版レールモントフ全集の重大な欠陥』と題するきわめて挑戦的な論文を発表した。かの女はこの中で『さよなら、むさくるしいロシア』にも触れ、編集者が基本テキストと認めた  $T_5$ こそ唯一の信頼できるテキストだということを、紙幅の都合で論証を割愛しながらも主張した。<sup>58)</sup> これに対して、ソ連科学アカデミヤ・ロシア文学研究所（プーシキン館）の中心メンバー

57) В. С. Нечаева. Вопросы текстологии. Сборник статей. М., АН СССР. 1957, стр. 51.

58) См.: М. Ашукина. Серьезные недостатки академического издания Лермонтова. —《Вопросы литературы》, 1957, No8, стр. 222-223.



4名（うち3名は全集の刊行に携わった）が連名で、同研究所の発行する雑誌「ロシア文学1958年」No2に『ある批評の重大な欠陥』と題する反論を發表し、それまで正しいとされてきた T<sub>1</sub> を脚注部分に移すことによってテクスチュアル・クリティシズム上の評価は遂行されており、またもっと信憑性の高いテキストが発見されて始めて、T<sub>1</sub> は巻末の「異文欄」へ移すことができるものと考えての割付けなのであるから、批評子の批難は当たらないとの、苦しい弁明を行なった。<sup>59)</sup>

それから2年ほど経た1959年2月、今度は『文学の諸問題』誌編集部が、論争が噛み合わないまま両誌の対立の様相を呈していることに遺憾の意を示し、未結着の諸問題をひきつづき論じあおうと提案して、『ふたたびレールモントフ全集の欠陥について』という一文を發表した。「文学の諸問題」編集部は、自らこの課題を實踐すべく、同年の5月号（No5）の「テクスチュアル・クリティシズムの諸問題」欄を提供して、「T<sub>5</sub> 説」をとるアシューキナと「T<sub>1</sub> 説」をとるプローホロフに論争させ、同時に文学者やテクスチュアル・クリティシズム専門家の討論参加を呼びかけている。<sup>60)</sup> その後おそらくはあちこちで数多くの議論がまき起ったのであろうが、残念ながら論文筆者は、ひとつを除いて、文献となって残っているものを確認できなかった。そのひとつとは、前の章でわたしたちが批判したヴィノグラードフの意見である。

論争史の概略をこのように振り返ってみると、アンドローニコフの投じた石の描いた波紋がいかにか大きかったかが分る。かれ以前の全集編纂者は、かならずしもテクスチュアル・クリティシズムの思考過程は明らかにしなかったが、アブラモフ・ヴィチにしろエイヘンバウムにしろ、先人の仕事の比較は慎重に行なったはずだし、また時代がそれほど掛け離れていないこともあって、とくにバルチャーニェフの「癖」はきちんと心得ていた

59) См.: Б. Городецкий, А. Докусов, В. Мануйлов, Г. Фридендер. Серьезные недостатки одной рецензии. —《Русская литература》, 1958, No2, стр. 240.

60) См. 《Вопросы литературы》, 1959, No5, стр. 159.

にちがいないのである。かれらはアンドローニコフのような「傾向的な」判定基準は少なくとも採用しなかった。

テクスチュアル・クリティシズム専門家のネチャーイェヴァがアンドローニコフを批判する理由は、その判定基準にあった。アンドローニコフ流の「テクスチュアル・クリティシズム」を性格付けて彼女は、「論証においては、どの稿が芸術的に『すぐれて』いて、どの稿がレールモントフの文体にとって『特徴的』かに注意が払われているものの、かたや、ロシアの民衆が憲兵に『従順』だというのが、かれらに『制せられている』に替わることによって、この作品の政治的な響きがどのように変わるのか、またレールモントフにとって、このような形容語を民衆に適用することが、どれくらい『特徴的』でありえたのかについては、一言もないのである」<sup>61)</sup>と述べている。

わたしたちは各異文テキストが(イ)の部分の違いによってその「政治的な響き」をいかに異にするかについてはすでに考察したし、詩人にとって、どちらがより彼にふさわしい形容語であるかについても判定を下した。今度は、(ロ)、(ハ)、(ニ)について順を追って考えることにしよう。

アンドローニコフが T<sub>5</sub> を支持するのは、(ロ)に関していえば、「カフカズの壁の彼方」が詩的形象であるのに対して、一方「カフカズの山脈の彼

61) В. С. Нечаева. Проблема установления текстов в изданиях литературных произведений XIX и XX веков. — В сб. статей «Вопросы текстологии», М., Изд. АН СССР, 1959, стр. 52. 原文: «Если в аргументации уделено внимание вопросу, какая редакция художественно “лучше” и какая более “характерна” для стиля Лермонтова, то в ней нет ни слова о том, как меняется политическое звучание произведения от замены “послушного” жандармам русского народа на “им преданного” и насколько мог быть для Лермонтова “характерен” подобный эпитет в применении к народу.» ただし、この性格付に先立って彼女は、バルチャーニェフが T<sub>1</sub> や T<sub>2</sub> に付した説明内容の方が、T<sub>5</sub> に付したものよりも、テクスチュアル・クリティシズムの専門家にとっては、より確かな信頼性を有すると主張しているが、本論文の第1章で分析した通り、問題はそれほど単純ではない。

方」は、地理学の用語を借用した表現だから、という理由による。<sup>62)</sup> かれのこの考え方は、当初から今日まで一貫している。だがはたしてレールモントフにとって、“стена”〔壁〕という「詩的形象」の方が“хребет”〔山脈〕という「地理学用語」よりも「特徴的」かどうかについては、実証的に反省した形跡がない。だからかれに替ってわたしたちがそれを行なわねばならないのである。用例を詩人の作品からひろい出して列挙してみよう。（下線はすべて木村の付したもの）

а) Пред ним, с оттенкой голубою,

Полувоздушной стеною

Нагие тянутся хребты;

—《Измаил-Бей》

〔かれの眼前には水色で濃淡をつけ、

なかば空気と化した壁となって

裸の山脈がのびている。

——『Измаил-Бей』

б) Я видел горные хребты,

Причудливые, как мечты,

—《Мцыри》

〔ぼくには山脈が見えたのです、

夢想のように不思議なのが、

——『Мцыри』

в) Хребта Кавказского вершины

Пронзали синею небес,

—《Кавказский пленник》

〔カフカズの山脈の頂があちこち

空の青みを突き刺していた、

——『カフカズの虜囚』

この三例からだけでも、アンドローニコフの唱える「美学的判断」が、レールモントフの作品に対してかならずしも有効でないことが分るである

62) См.: М. Ю. Лермонтов. Собр. соч. в 4-х томах. Т. I, М., Изд-во Худож. лит-ры, 1964, стр. 594.

う。a) の例においてさえ、詩人は T<sub>5</sub> の(□)のような隠喩で「壁」を用いずに、「山脈」を併記して、直喩にしている。他の二例はレールモントフが、アンドローニコフのいう「地理学的用語」を、けっこう「詩的形象」の創造のために積極的に使用している事実を示している。詩人がいつもメタフォリカルな表現を優先させると考えるのは誤解だし、またメタファーを使わなくとも、「詩的形象」を作り出す手段が他にもあるのは自明の理である。

『さよなら、むさくるしいロシア』において、(□)の部分が隠喩で表現されているほうが、この詩の美的価値や、その政治的内容、読者の共感を喚起する機能等々が、それだけすぐれているといえるだろうか。また、それがたとえ肯定されたからといって、そのことをもって原本であるという信憑性が決定的に裏付けられるであろうか。カフカーズ(Кавказ)の山々を表現する時に、レールモントフが“хребет”という語を再三用いているという統計学的事実の方がまだ、テクスチュアル・クリティシズムからすれば、より確かな根拠なのである。

詩人にとってこの“хребет”という語は、アンドローニコフが考えているような、たんなる「地理学用語」ではなかった。たとえばレールモントフは「脊椎」を原義とするこの語を、ある物語詩の準備草稿であったと考えられる「律動的散文」において、掛け言葉として用い、自分の幼児体験の中に重要な位置を占める存在であることを強調している。「カフカーズの青い山たち、君たちに挨拶をおくるよ！君たちはぼくの幼年時代を慈しんでくれたね。その野性的な背骨(=連山)にぼくを乗せ、雲で包み、天空に慣れ親しませてくれたものだから、それ以来いつもぼくは君たちや天空のことを想うのだよ」<sup>63)</sup> (下線—木村)。このことからして、(□)は力強い

63) II, 26. 原文: «Синие горы Кавказа, приветствую вас! вы взлелеяли детство мое; вы носили меня на своих однчалых хребтах, облаками меня одевали, вы к небу меня приучили, и я с той поры все мечтаю о вас да о небе.» この他にも用例 a) の『Измайл-Бей』には «Темны преданья их. Старик чеченец, / Хребтов Кавказа бедный уроженец, -» (III, 155. 下線—木村) とあり “Кавказ” と “хребет” の結合は、レールモントフの詩的言語においては非常に強いことが分る。

響きと、特殊ルールモントフ的意味あいを担った“хребет”であった公算の方が強いと、わたしたちは考えるわけである。

さて次は(イ)の検討に移ろう。ここでもひとまず、“укрыться”と“сокрыться”の使用頻度の比較を行なってみよう。ルールモントフの詩の中で用いられているこれらの動詞および、それをもとにして作った形動詞と副動詞を、単純に機械的に数えあげてみると“сокрыться”（これには、文体的に中立的な“скрыться”も含めた）の方が圧倒的に“укрыться”よりも多く使用されているという結果が得られる。論文筆者は両者あわせて30ぐらいの用例をひろい出したが、そのうち“укрыться”に属するものは、わずかに3例を数えるのみであった。比率にしておよそ10対1である。見落しの数が相当あったとしても、この比率に基本的な変化は生まれないであろう。

この結果から即座に結論を導き出すのが危険なことは、いうまでもない。まず第1に、“укрыться”と“сокрыться”では文体の面で色彩を異にするからである。前者がごく中立的なのに比べて、後者は文語的で荘重な響きをともなって——そうでない時は中立的な“скрыться”が——使用される。この点を強調して（もっぱらそれを唯一の理由に）「明らかに、“сокроюсь”の方が、ただ一個所口語的な形容語“немытая Россия”のきらりと光っているこの詩の、抒情的に高揚した文体とよく調和している」<sup>64)</sup>と結論するのはヴィノグラードフである。しかしだからといって、“укроюсь”なら全体の文体的色彩と調和しないというわけではない。文体的に中立的な語彙は、たいていの文体と、色あいだけを問題にするなら、「調和」するはずだからである。げんに『さよなら、むさくるしいロシア』に含まれる33の語彙のうちの大多数は文体的に中立なものではないか。わ

64) В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит-ры, 1961, стр 112. 原文: «Очевидно, сокроюсь более гармонирует с лирически повышенным стилем стихотворения, в котором говорит ярким блеском лишь один разговорный эпитет — немытая Россия.» (下線部は原文ではイタリック体)。

わたしたちが文体を問題にするのは、「あるいは～なら」〔Быть может,～〕というある種の「気弱さ」を含み、どこか「捨て鉢な」姿勢の感じられる詩の後半部分において、“сокроюсь”というのでは少し「もったいぶり」が目につきはしないかという気がかりからである。ソ連の学者は、どちらの説に立つかの別なく、この詩を「革命的反発」を「鋭く表現した」「憎悪の」「政治詩」だと見ることでは一致している。だがその「激しさ」の底に、かすかな「翳り」があるからこそ、この詩は深い、人間的な感動をわたしたちに与えているのである。

“сокрыться”ではなく“укрыться”を採る第2の理由は次の通りである。このふたつの動詞の辞書的な意味や、同世代人作家における用例がどうあれ、少なくともレールモントフの使い方を調べたかぎりでは、意味上の微妙な使い分けがなされている。この微妙なちがいが『さよなら、むさくるしいロシア』のばあい“сокроюсь”ではなく“укроюсь”ではなかったかと考える根拠を提示しているのである。この差異を対照的に見せている好例があるので引用してみよう。(下線はすべて木村が付したもの)。

Ах! здесь любовь моя погреблена;	ああ! ここは我が愛し <small>ひと</small> の女を葬った地。
Здесь крест, нагнутый временем, торчит	ここには、時流れ傾ぶいた十字架が
Над холмиком, где Лоры труп сокрыт.	ローラの亡骸の隠れ眠る塚の上に立つばかり。

При верной помощи теней ночных,	たよりの夜陰にうまくまぎれ
Бывало, мы, <u>укрывшись</u> от родных,	ぼくと彼女は身内の目を逃れ
Туманною озарены луной,	おぼろげな月の光の中を
Спешили с ней туда рука с рукой;—	手に手を取ってあちらへ急いだものだ。
—《Джюлио》	——『ジュリオ』

“укрыться”が、この物語詩の例に見るように、どれもたんに「隠れる」「目を逃れる」、ようするに、そのものの存在は確かだが何かから逃れて、あるいは何かに隠れて「見えない」という意味で用いられているのに対して、“сокрыться”や“скрыться”は、引用例でもそうだが、「死」と

か「不吉な事態」との関連で「いなくなってしまう」こと、あるいはそのものの存在自体が不明になるような「消えかたをすること」、こういった意味あいでも用いられることがほとんどである。<sup>65)</sup> もちろん数多くの用例の中には、それからはずれている場合も見受けられる。それでもそれらは、“укрыться” に比べて、「じっとして」、「すっかりと」、「気配も悟られぬほど」といった、隠れ方の度合の強さが、一般に目立っている。<sup>66)</sup>

『さよなら、むさくるしいロシア』の中で詩人が少し「やけ気味」に言っている「隠れおおすさ」という言葉は、はたしてどちらの意味であろうか。それはもちろん、「千里眼」や「地獄耳」のとどこかぬところに自分の身を置けるかもしれない、という意味であって、自己の存在が不明になるような消え方をするというのでもなければ、運命に身を委ねてしまうような隠れ方をするというのでもないはずである。一種の「気弱わさ」や「捨

65) ランダムにひろってみるだけでも、次のような文例にぶつかる。(下線はすべて筆者が便宜上付したもの) а) Года унылой чередой / От нас невидимо сокрылись. —《K\*\*\*》; б) Бежал!.. и скрыл за дальними морями / Следы печальные твоих высоких дум. —《Наполеон》; в) (1) Тогда!.. быть может, уж могилой / желанной скрыта буду я. (2) И скрылась вдруг в дали тенистой, / Как некий призрак гробовой. (3) Через поляну — за холмами / Сокрылась вдруг в тени ночной. (4) Остаток грустный и печальный / Плывет, как саван погребальный, / И скрылся к каменным скалам. (5) Не видя девы черноокой, / Сокрылся он в глуши лесной —《Кавказский пленник》; г) Никто не знал во всем краю, / Куда сокрылась она; —《Последний сын вольности》. また否定形で表現した《И страсти первые людей / Не скрылись от моих очей》(《Азраил》) のように、間接的に“скрыться”のルールモントフ的用法を立証する例もある。

66) これも作品中から文例をひろい出してみよう： а) Сидел в пещере, где от зною / Он мог сокрыться..., —《Кавказский пленник》; б) ..... Любовь / Под тенью липовых ветвей / Скрывается от глаз людей. —《Последний сын вольности》; в) Одно мгновение на кургане / Он черной птицею мелькнул, / И скоро скрылся весь в тумане, —《Измаил-Бей》. (下線はすべて筆者)

て鉢」な姿勢とともに、レールモントフ特有の「ふてぶてしさ」もまた、この詩の全体の色調の中には流れているのである。さてそこで結論を導き出そう。T<sub>1</sub> の(い)が正しいかT<sub>5</sub> の(い)が正しいか、決定的な立証の手がかりはない。しかし、いわば状況証拠となるものを複数の角度から検討した結果を総合的に眺めたかぎりでは、T<sub>1</sub> の“укроюсь”が原本にあった公算の方が強いことは否めないのである。

さていよいよ最後の検討課題に移ろう。(二)の部分の問題はけっきょく、“царей”が正しいか“пашей”が正しいかに帰着する。後者の考え方を支持する人たちの理由は、ふたつの根拠にねざしている。ひとつは“пашей”を「憲兵」と解するなら詩の全体の意味体系は矛盾なく完結するが、“царей”では意味上の辻褄が合わなくなるということ、ふたつめは、最終行の“ушей”と韻の合うべき言葉としては、“пашей”の方がより完全であるし、またそれがレールモントフの押韻のスタイルとも合致する、というのがその理由である。

韻の特徴から「“пашей”説」を主張するのは、これもまたアンドローニコフである。ただし「“пашей”説」を採る他の研究者の、彼の論拠に対する態度には比較的消極性が感じられる。たとえばアシューキナは、「かなり当を得ている」〔вполне уместно〕と評価するだけに留まり、それ以上はこの方向で自説を深めて展開することを避けている。<sup>67)</sup> ヴィノグラードフも、T<sub>2</sub>の発見者であるピーガリョフがアンドローニコフの「美的文体論的性格の論拠」〔доводы эстетико-стилистического характера〕に取り合わなかったとあって批難はするものの、(二)に限っていえば、この論拠に則った立証方法を自ら採用しているわけではない。<sup>68)</sup> このアンドローニコフ流の論拠では不十分だからこそ、かれらは、文法上の問題だの、詩の中の他の語句との関連だの、“паши”の意味の歴史的・地理的特性だ

67) Ср.: М. Ашукина. История — опора текстолога. — «Вопросы литературы», 1959. No 5, стр. 162.

68) Ср.: В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. М., Изд-во Худож. лит-ры. М., 1961, стр. 107, 108 и 111.



のに依拠した、「別の」論拠による補強が必要だと認めているわけである。たしかに，“пашей”——“ушей”の方が“царей”——“ушей”よりも韻としては合い方がより大きいであろう。しかし，レールモントフの詩には，語尾の部分だけで一致する「弱い」韻の例もまた，いくらでも存在するのである。だから，この論拠は決め手にはならない。これは所詮，ひとつつめの，つまり語義を判断の尺度にした根拠が有効になってはじめて，補助的な意味で，いくらか効力を持ちうる「状況証拠」なのである。

ではそのひとつつめの根拠はどれぐらい有力なものであろうか。ヴィノグラードフは，「千里眼」だの「地獄耳」だのを持つ「皇帝」の形象が，この詩のそれまでの文脈の中に伏線として含まれてはいないし，「皇帝」が複数形なのは，皮肉を込めた誇張表現だとしても理解に苦しむ，また「千里眼」や「地獄耳」は謀報員に用いる例はあっても，「皇帝」への形容語としてはなじまないといって，“царей”を退ぞける。<sup>69)</sup> またアシューキナは，ロシアの近隣のアジア系諸国の専制的・暴君的社会政治制度の生み出した特殊な事実や現象，あるいはそれらと結びついた地名をあらゆる語彙をそのまま借用して，同じような体質をもつロシアの具体的な対象を指すのに比喩的に用いられた例を多数挙げ，“паши”もまた皇帝官房第3局の「憲兵ども」のかわりに（公表するつもりはなかったのだから，検閲を意識していかえたのではなく，「純粹に文体的な」目的で）使ったのだと主張し，ついで，それが後に，60年代に入って高まりを見せた革命的民主主義の雰囲気の中で，暗号だと誤解されたために，これを「皇帝」と「解読」したテキストが流布していったものと推察している。<sup>70)</sup>

これに対して「“царей”説」に立つプローホロフも，この語が複数形であることにこだわって，これは「ニコライ I 世」を指しているのではなく，その当時国を支配していた者たち全体を念頭におき，一般化したのだ

69) Там же, стр. 111.

70) См.: М. Ашукина. История — опора текстолога. —《Вопросы литературы》. 1959, No 5, стр. 162-165.

と、何とも苦しい弁明を試みている<sup>71)</sup> かれによれば、ゲルツェンはニコライ I 世のことを「戴冠した曹長」〔коронорованный фельдфебель〕と呼んだくらいだから、憲兵も、上級職のものなら「戴冠せざる皇帝」〔некоронорованные цари〕と呼んでよいのだと、ヴィノグラードフならずとも首をかしげたくなる奇説を開陳する。<sup>72)</sup>

はたしてレールモントフは『さよなら、むさくるしいロシア』の詩の中で、ロシアの皇帝を描かなかっただろうか。かれはこの詩の 2 行目でロシアのことを「奴隷たちの国、旦那たちの国と」呼んでいる。この「旦那たち」とは、いったい誰のことであろうか。この中に「皇帝」は含まれないのか。

含まれないとすれば、「旦那たち」とは「空色の制服」を着た「領袖たち」、すなわち憲兵ということになる。するとレールモントフが訣別しようとしているのは、この憲兵と民衆からなる「むさくるしいロシア」だと解釈される。

レールモントフ追放の命令を直接言い渡したのは、たしかに皇帝官房第 3 局である。最終的な判断は、あきらかにその長官職にあつて辣腕を振ったベンケンドルフが下したものであった。しかしだからといって、詩人がロシアの支配者を憲兵だと考えていたと解するのは、いかにも詩人の政治感覚を矮小化するものではないだろうか。レールモントフの世界観から見て、「旦那たち」には、皇帝をはじめ、その抑圧機関のさまざまな分野で支配者として振舞うものたちも、『詩人の死』の中で糾弾されている「玉座の傍らにたむろする」成り上り貴族たちも含まれていると解すべきである。また一方「奴隷たち」も、たんに民衆のみを指していると解すべきではない。レールモントフの規定する奴隷的属性の染み付いた人間は、貴族であれ、雑階級人であれ、この奴隷の中に入れてよいのである。

この詩の 1 行目と 2 行目が、ロシアを広くズームアウトしてとらえてい

71) См.: Е. Прохолов. Источники и анализ текста. — «Вопросы литературы», 1959, No 5, стр. 168-169.

72) См.: там же, стр. 169.

るのに対して、3・4行目は、「旦那と奴隸」の関係が特徴的に具現化されている“部分”に向けてズームインしたものである。その被写体にあたる「空色の制服」という換喩は憲兵の制服の色と一致するため、誰ひとり疑うことなく「憲兵」を指すものとみなしている。だが空色の制服はその他にも、槍騎兵とコサック兵が着用していた。軍服が一般に暗緑色をしていた中で、この空色と、重騎兵の白、驃騎兵の赤および薄緑色が特別の扱いを受けていた。レールモントフの制服は赤であった。驃騎兵には詩人をはじめ、概して反骨心に富むものが多く、おそらくその心意気が「空色の制服」に代表される政治的立場、つまり皇帝に対する盲目的忠誠心と、反体制的傾向に対する情容赦ない態度とを特徴とする立場への蔑視と憎悪になって現われているのである。これは当時のコサック兵にも共通する傾向であったから、「空色の制服」という換喩は、皇帝の支配と抑圧の機能を直接的に担っているものを一般に総称したものと考えてよいであろう。

2連目に移って訣別の辞は「おまえ」に向けられる。「おま<sup>え</sup>の<sup>皇</sup>帝<sup>た</sup>ち」または「おま<sup>え</sup>の<sup>領</sup>袖<sup>た</sup>ち」と呼びかけたこの「おまえ」とは、誰のことであろう。こういう疑問自体が、多くのソ連の研究者にとって訝かしく思われることであろう。論文筆者の知るかぎり、どの説を主張するかにかかわらず、これを「民衆」と解釈する以外の見解にはお目にかからなかったからである。たしかに、1連目の最後で「おまえ」(わたしたちの訳では「きみら」)と呼びかけられている「民衆」と同一だと解するのが一見自然のように見える。だが詩人の訣別の辞はそもそも、ズームアウトしてとらえた「むさくるしいロシア」全体に対して向けられたものである。だからこの「おまえ」は、疑人化された「ロシア」として解釈する方が、詩の全体の構成からいって正しいと思われる。2連目において、カフカーズに對置されるのはロシアなのである。また、いちどズームインされたものを、アングルを変えてズームアウトしてはじめて、詩の完結度は増す。ところが、もしこの「おまえ」が「ロシア」だということになれば、“паша”を「領袖」＝「憲兵」ととって、T<sub>5</sub>が正しいと考える見方は成り立ち難い。ロシアを支配し領有し君臨しているのは、「皇帝」であって「憲兵」

ではないからである。したがって逆に「“нашей” 説」が成立するためには、2連目の「おまえの」という物主代名詞は「民衆」を意味しなければならない。

レールモントフの詩はきわめて明解な対句性と対照性を大きな特徴とする。この詩も例外ではない。1行目の「むさくるしいロシア」は2行目の「奴隷たちの国、旦那たちの国」と、3行目の「空色の制服ども」は4行目の「民衆」と、7行目の「千里眼」は8行目の「地獄耳」と、それぞれ対句を成す。では5行目の「カフカーズ」は6行目の何と対句を成すのか。どう見てもこれは、レールモントフがそこから追い出されなければならない「ロシア」と見る以外にない。「おまえの皇帝たち」とは「ロシアの皇帝たち」のことなのである。

(二)を「皇帝」とするとき、だれもが覚えるわだかまり、つまり、なぜ複数形なのかという疑問は依然として残る。レールモントフにとって皇帝とはニコライ I 世ひとりしかいなかったからである。しかし、この「常識」は、わたしたちが詩人の夭折を知っていることから生まれたものだという、ごく当り前の事実を忘れているからこそ罷り通るのである。37才で死んだプーシキンは3人の皇帝の治世に生きた。レールモントフだって70才まで生き長らえたとすれば、3人の皇帝から迫害を受ける可能性はあったのである。レールモントフのこの時点でのロシアに対する絶望の念は、自分の全生涯を通して歴代の皇帝たちが徹底的に自分を追跡し自由を奪うであろうことを覚悟したほど、強烈だった。だから「皇帝」は複数形であって当然なのである。

「地獄耳」や「千里眼」が「皇帝」に対する形容語としてはなじまないと考えるヴィノグラードフも、ニコライ I 世がレールモントフの拳動を微に入り細に渡って注視し、警戒を怠らなかったのを、知らぬわけではあるまい。皇帝官房第3局とは、その名が示す通り、自立した国家機関というよりは、皇帝陛下の文字通り耳目となって働く機関であったのは常識である。ヴィノグラードフの解釈は、まさにこの詩の思想的内容の歪曲と矮小化以外のなにものでもない。

わたしたちはこうした検討の結果、(≡)もまたT<sub>5</sub>ではなくT<sub>1</sub>のテキストの方が、レールモントフの原本である可能性を強く印象付けると結論せざるを得ないのである。

## ま と め

ソ連において今日 **народ** [人民, 民衆] という言葉は、一種の呪縛を呼び起す語彙になっている。レーニンにおいてはまだリアルな歴史的社会的存在として考察の対象となっていたナロードが、スターリン時代になって、「人民の敵 [враг народа]」という忌わしい烙印が乱用され、ナロードが一気に絶対者の地位にまで高められて以来（絶対者とはスターリンその人であって、人民はそのようなものからはおよそ程遠かったのに）、それを表わす「ナロード」という言葉はもはや、さりげない日常的な意味で用いることが、はばかれるようになった。こうして、本来史的唯物論の体系の中で正しく規定されていた“人民”は、今やその俗流化された理解が横行しだしたのであった。

ソ連軍が突如アフガニスタンに侵入して暴力的に政権のすげかえを行なった事件は、ソ連国内では当初ほとんど報道されなかった。ところがしばらくして、ソ連の水爆の父であり現在反体制運動の指導者となっているサーハロフ博士がゴーリキイ市に強制移住させられた事件は、いち早く報道された。論文筆者はその時ちょうどソ連科学アカデミヤ・ロシア文学研究所に留学中であつた。このふたつの事件について、同アカデミヤのレニングラードの外事課の一職員が「個人的な関心で」と断った上で、筆者の感想を聞きたいと申し入れてきたことがあつた。筆者は自分の意見を述べ、最後に「サーハロフ博士が裁判抜きで強制移住されたのは解せない」と付け加えた。それに対してこの職員のいった言葉は今でも鮮明に記憶している。「サーハロフは人民を侮辱したのですよ。日本人なら天皇を侮辱することはできないでしょう。皇居前で天皇を侮辱するようなデモは許されていないでしょう？それと同じで、サーハロフはソ連の人民を侮辱しているのだから裁判を受ける権利などないのですよ」——これが、大学で歴史学

を専攻し、現在のソ連ではエリート職といってもいい地位にある人の答えだったのである。

ヴィノグラードフが「従順な人民」という語句を原本と認める人たちに対し、執拗に、異様な激しさで攻撃を加えた背景には、おそらく「ナロード」という言葉が今日のソ連社会において根強く持つこの呪縛性の作用があった。それはこの有名な言語学者・文学者にさえも知らず知らずのうちに影響を与えていたのであろう。

そのような呪縛から自由になって考えてみると、今日『さよなら、むさくるしいロシア』の原本に最も近いと見做されているT<sub>5</sub>が、わたしたちが見てきた通り、決して高い信憑性を持ってはいず、むしろT<sub>1</sub>こそが、この詩の主要テキストとして採用されてよい諸条件をそなえていることが分るのである。

さらに、虚心に目を開いて読めば、たとえば“пашей”はバルチャーニェフの創作だったと考える説が出てこないのが、不思議に思われる。バルチャーニェフは(=)の部分“царей”となっているテキストを確認済みであった。バルチャーニェフが「ロシア古文書」誌にT<sub>5</sub>を発表した時、ロシアの悪名高い検閲制度はもちろん存在していた。その上バルチャーニェフという人は、わたしたちが第1章で明らかにしたような、質の低いジャーナリストであった。この三つの要素を考慮に入れれば、ごく自然に考えて、“пашей”はバルチャーニェフの創作（あえて改竄とはいわぬことにしよう）ではなかったのかという疑いが生まれるはずである。そしてそうなれば、“пашей”が“ушей”とあまりにもよく韻が一致することも、かえって懐疑心を刺激するのである。

論文筆者は、(口)の“стена”もバルチャーニェフの創作ではなかったかと考えている。「新発表」と銘うつ以上は、今まで公表されたテキストとどこか違っていなければならなかった。そこで、次のような疑念をはさむ余地が生まれる。(ハ)の“укроюсь”と“сокроюсь”は、詩人の朗読を聞き手が書き留める段階で十分に起りうる差異である。ところが“хребтом”と“стеной”は単純な意味で同義語ではないし、音声面でも少しも一致す

るところはない。それ故に、もしかしたらバルチャーニェフはこのところを書きかえたのではないだろうか。この疑念は、払拭しきれぬ説得性を有していよう。

だが誰の目にも明らかなように、この疑いを立証する手段も、晴らす手段も、現在のわたしたちには与えられていないのである。だからわれわれの講究はここで停止せざるをえない。確かなことは、『さよなら、むさくるしいロシア』の主要テキストとして採用すべきはT<sub>1</sub>であってT<sub>5</sub>ではないということである。

T<sub>2</sub>もT<sub>1</sub>と同様、主要テキストの要件を備えているという主張は可能かも知れない。T<sub>1</sub>とT<sub>2</sub>の違いは(i)の部分一個所だけで、それも日本語に訳したとき「従順」とするか「柔順」とするかとの差異にほぼ等しい。わたしたちは今のところ、どちらが原テキストにより近いか、決するすべを持たない。しかし、テクスチュアル・クリティシズムからすれば未解決の問題として残るこの差異も、実践的立場からすれば、これ以上穿鑿する必要はないものと思われる。

この論文を書くにあたって、筆者は必要な文献資料を身近かなところで入手できなかったため、遠方の方がたの援助を仰がねばならなかった。北大スラブ研究所の出かず子さんと早稲田大学院生藻利佳彦氏は、貴重な時間を割いて、それぞれの図書館所蔵のマイクロフィルムからこちらの必要としている個所を探しあて、そのコピーを送って下さった。またレニングラードの科学アカデミア図書館に勤務するラリサ・フヴォシエフスカヤ〔Лариса Хвощевская〕さんは、機械的コピーは手続きがめんどろでかえって時間がかかるからといって必要資料を大量に筆写して下さった。これらの方がたには、筆を置く前に、心からの謝意を表したいと思う。

1981年8月